富山市埋蔵文化財調査報告144

富山市願海寺城跡
発掘調査報告書

— 自動車整備士専門学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2005

富山市教育委員会

富山市願海寺城跡
発掘調査報告書

— 自動車整備士専門学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

２００５

富山市教育委員会

例　　言

1．本書は、富山市に所在する願海寺城跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、自動車整備士専門学校建設に伴うもので、富山市教育委員会の監理のもと山武考古学研究所が実施した。

3．調査については、以下の通りである。

所　在　地　富山県富山市野々上字地送13－1

調 査 面 積　1,600m^2

現地調査期間　平成16年10月18日～平成16年11月26日

整 理 期 間　平成16年12月1日～平成17年2月28日

調 査 担 当　土生朗治 戸部孝一（山武考古学研究所所員）

4．現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々・機関の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

舟竹　孝、三枝教次、若宮得幸、新湊市博物館、アルビス株式会社、堤地所株式会社

5．本書の執筆・編集は、Ⅰ、Ⅱ－2、Ⅲ－1・3・4を土生、Ⅲ－2を戸部が行い、Ⅱ－1を堀沢祐一（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）、付編を古川知明（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）が行った。

6．自然科学分析については、株式会社吉田生物研究所に依頼し、木製品の樹種同定、保存処理を行った。

7．本調査にかかわる図面・写真・出土品等の資料は富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

例言　目次　凡例

Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境……1

Ⅱ　調査の経緯……3

1　調査に至る経緯……3

2　調査の経過……3

Ⅲ　調査の概要……4

1　調査の方法と層序……4

2　遺構……6

3　遺物……16

4　小結……26

付編　願海寺城下町の推定……31

写真図版……37

報告書抄録……56

凡　　例

木製品の墨塗り部分　　珠洲断面

Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境

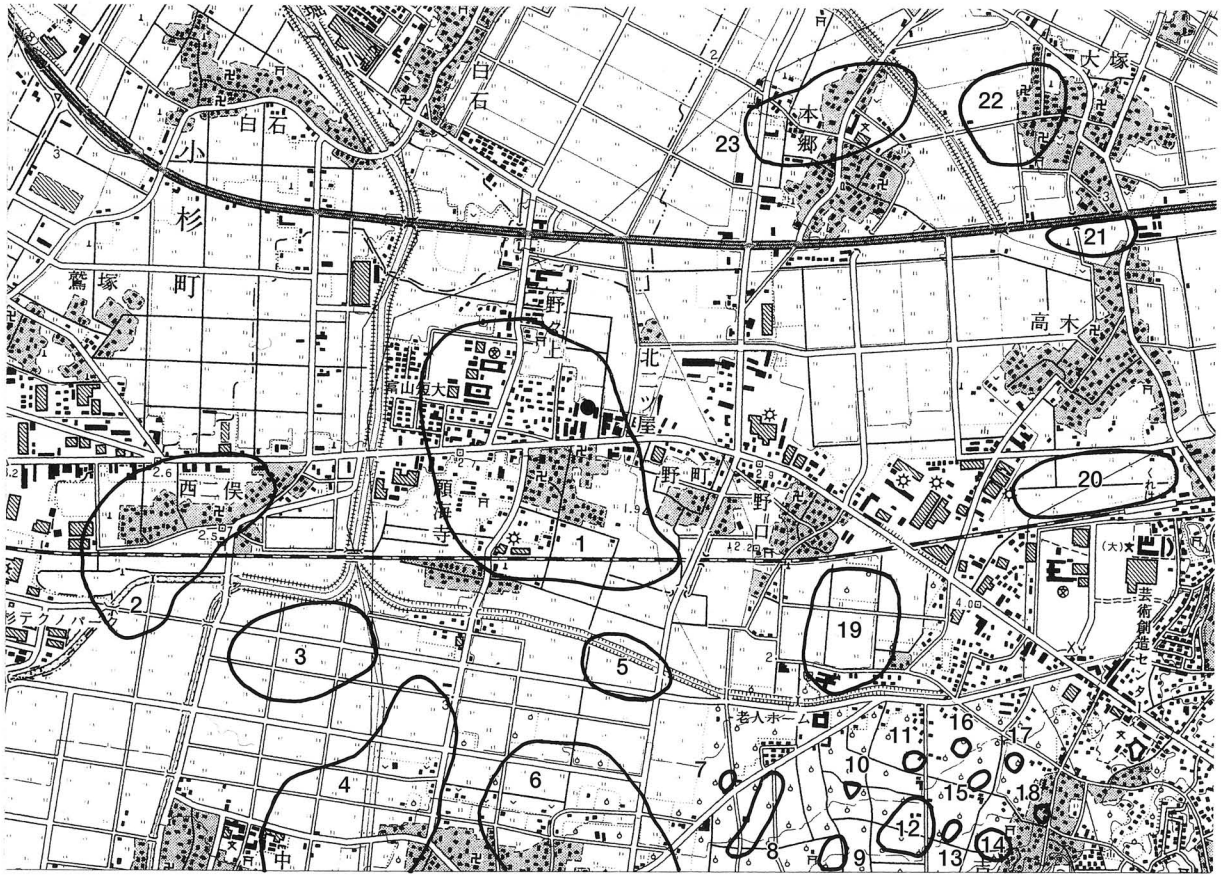
富山市北西部に位置する願海寺城跡は、射水丘陵の北に広がる射水平野の南東部に所在し、平野を北流する鍛冶川の右岸に位置する。願海寺城跡の周辺には、中世の遺跡が本跡を囲むように分布している。願海寺城跡の西側から南側へ約１～２km 離れて西二俣遺跡と東老田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、東側から北東側にかけては呉羽駅北遺跡や大塚遺跡・呉羽本郷遺跡等が見られる。願海寺城の中心部と目されるのは、調査地点南西方向の標高３m 前後の微高地上である。調査地点は、中心部北東側の標高約２m 地点で、低地へ移行する位置にあたる。願海寺城跡に関する調査としては、これまで５件の試掘確認調査と平成14年８月の本調査１件が富山市教育委員会によって行われている。平成14年８月の本調査（富山市教育委員会 2003）では二重の堀構造が確認され、16世紀第２～３四半期を中心とした陶磁器や漆椀、塼、木製品が出土している。

第１図　発掘調査地点（1：2,500）

表１　周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	年代（時代）							種別	No	遺跡名	年代（時代）							種別
		縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世				縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	願海寺城跡		●	●			●	●	城館跡	12	吉作北Ⅲ遺跡				●	●			散布地
2	西二俣遺跡		●		●	●	●	●	散布地	13	吉作北Ⅳ遺跡				●	●			散布地
3	東老田Ⅳ遺跡				●	●	●		散布地	14	吉作北Ⅴ遺跡	●			●	●			散布地
4	東老田Ⅲ遺跡	●中～後	●		●	●	●		散布地	15	吉作北Ⅷ遺跡				●	●			散布地
5	東老田Ⅱ遺跡		●	●	●	●	●	●	集落跡	16	吉作北Ⅰ遺跡				●	●			散布地
6	東老田Ⅰ遺跡	●前、後			●	●	●	●	集落・生産跡	17	吉作北Ⅸ遺跡				●	●			散布地
										18	吉作北Ⅶ遺跡				●	●			散布地
7	住吉北Ⅱ遺跡				●	●			散布地	19	高木南遺跡		●		●	●	●		散布地
8	住吉北Ⅱ遺跡				●	●			散布地	20	呉羽駅北遺跡	●			●	●	●	●	散布地
9	住吉神明社東遺跡	●			●	●			散布地	21	大塚南遺跡				●	●	●	●	散布地
10	吉作北Ⅲ遺跡				●	●			散布地	22	大塚遺跡				●	●			散布地
11	吉作北Ⅱ遺跡	●後			●	●			散布地	23	呉羽本郷遺跡		●	●			●		散布地

第２図　大正７年陸地測量部迅速図（1：25,000）より富山・高岡



第３図　周辺の遺跡分布図（1：25,000）　　● 調査地点

Ⅱ　調査の経緯

1．調査に至る経緯

願海寺城跡は埋蔵文化財包蔵地として『富山市遺跡地図 埋蔵文化財包蔵地所在地地図（改訂版）』（平成５年３月発行）に初めて登載し、市遺跡 No.66とした。包蔵地範囲については、昭和63年～平成３年の分布調査の成果を踏まえ、高岡徹氏が調査した字・通称の範囲（高岡 1975）を願海寺城及び城下の範囲と推定して決定した。その時点の埋蔵文化財包蔵地の範囲は458,000m^{2}である。

これまで遺跡内では数回の試掘確認調査や発掘調査が実施されている。平成14年の発掘調査では天文～天正年間の堀跡が確認され、願海寺城主であった寺崎氏が拠った願海寺城跡の可能性が高いと指摘された（富山市教育委員会 2003）。

平成16年８月、野々上地内における自動車整備士専門学校建設事業に伴ない、建設予定地（4834.89m^2）の埋蔵文化財所在について照会がなされた。予定地は南半が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、その部分を中心として試掘確認調査を必要と判断した。試掘確認調査は同年９月に実施し、予定地の西半、1,600m^{2}に遺跡の所在を確認した。調査では中世の溝跡を検出し、越中瀬戸焼・漆椀・木製柄杓・穀物塊・桃の種実などが出土した。

これらの結果に基づき、事業にかかる埋蔵文化財の取扱いについて事業者側と協議を行なった。協議の結果、建物建設等工事にかかる1,600m^{2}の発掘調査が必要となり、緊急に民間発掘調査機関に委託して発掘調査を実施することとした。平成16年10月、この協議内容について市教育委員会、事業者側、山武考古学研究所の三者で協定を締結し、同年10月18日に発掘調査に着手した。

なお、願海寺城跡の範囲については、今回の試掘確認調査成果に基づく検討により、当初の範囲から北東へ少し広げ、493,000m^{2}の範囲とした。

2．調査の経過

本調査は、平成16年10月18日～平成16年11月26日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

10月期　18日調査区を設定し、北地区から重機表土除去作業を開始する。表土除去終了後、北地区南部の包含層掘り下げを行う。
北地区北部の包含層掘り下げ及び遺構確認作業を行う。

11月期　北地区の遺構調査を開始する。北地区の遺構調査終了後、南地区の包含層掘り下げを行う。
16日から南地区の遺構調査を行う。
23日に空撮、26日発掘器材の撤収を行い、調査のすべてを終了する。

文献

高岡　徹　1975 「国人寺崎氏の本拠地―願海寺―」『富山史壇』第61号　越中史壇会
富山市教育委員会　2003 『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ―水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡―』

Ⅲ　調査の概要

1．調査の方法と層序

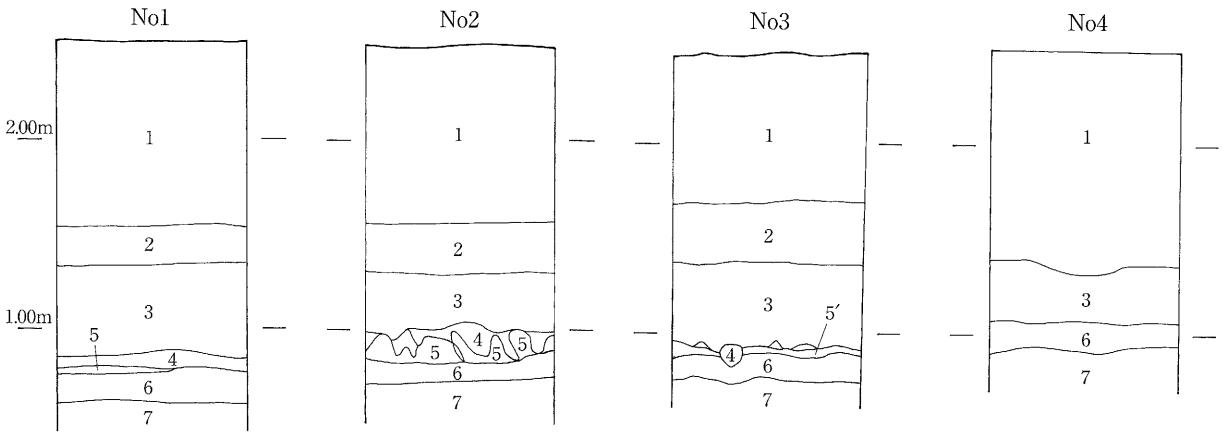
調査の方法

調査区の座標は、公共座標を基準に設定した。座標杭は10m 間隔で打設し、調査区内に一辺10m の方眼グリッドを設定した。各グリッドの名称は、世界測地系直角平面座標第Ⅶ系の X＝79,920、Y＝－2,060を基点として北に向かって X＝０～80、東に向かってY＝０～50の範囲の南西隅の座標値で表記した。

調査区の掘り下げは、盛土・表土除去で重機を使用した。包含層、遺構内出土遺物は、可能な限り平面位置および高さを記録して取り上げた。遺構実測図の縮尺は1/20を基本として、必要に応じて1/10・1/40も作成した。写真撮影は、35mm モノクロフィルム、35mm カラースライド、120mm モノクロフィルムを使用して調査の各段階で撮影を行った。航空写真は、ラジコンヘリを使用して撮影を行った。

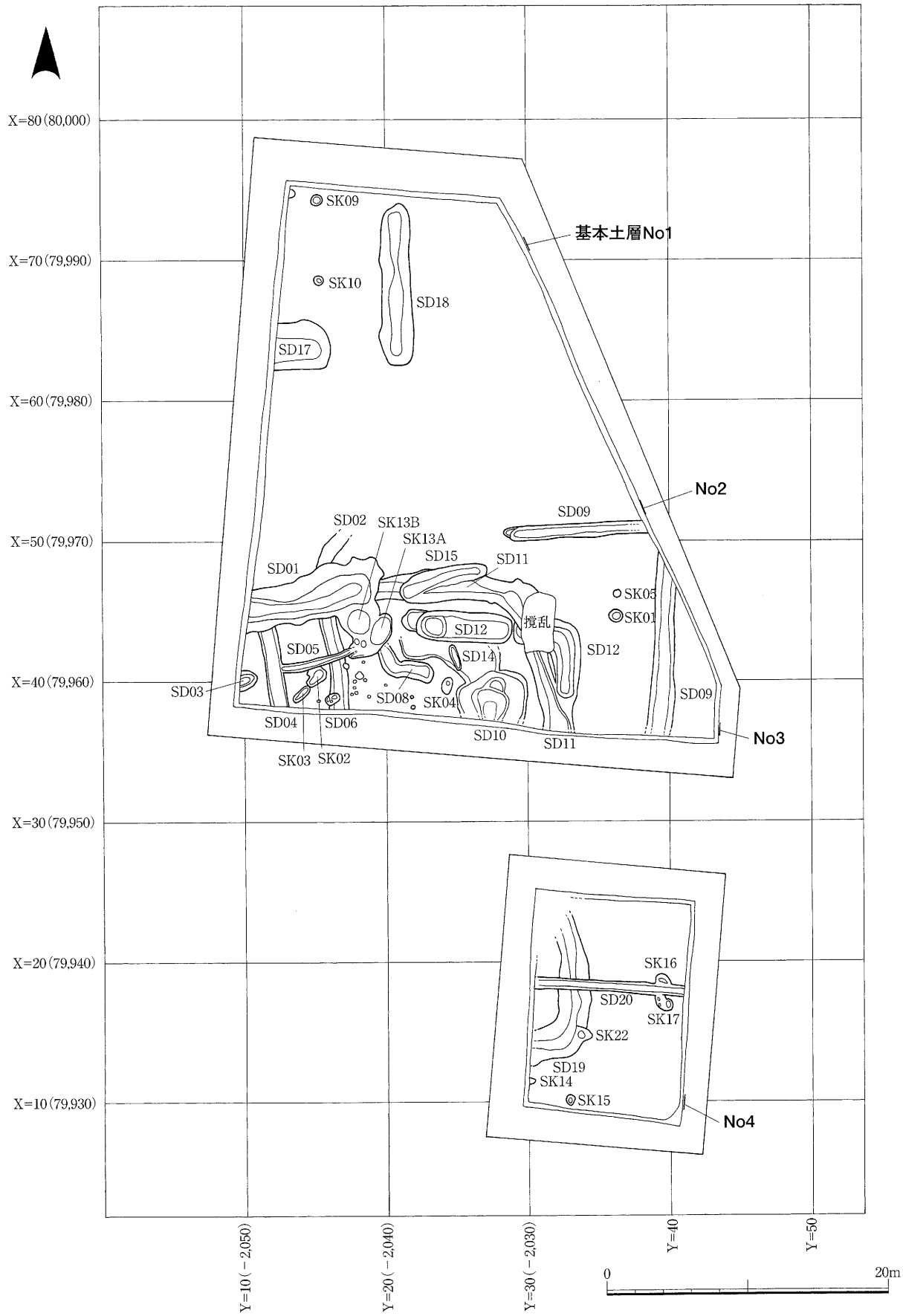
層序

調査区の層序は、表層が厚さ1.1m の砕石混じりの盛土（１層）と砂質の盛土層（２層）である。その下が旧表土層であり、上層が旧耕作土層の厚さ約50cm の黒褐色シルト（３層）である。３層の最下層部は厚さ10cm 程度の中世遺物を含む薄い包含層になっている。北側調査区の中央から北東側には、厚さ６～９cm の暗褐色シルト（４層）が堆積している。北側調査区の中央部の基本土層 No.２地点では耕作によると考えられる土層の乱れがあり、４層が５層の茶褐色シルト中に鋤き込まれている。５層は厚さ約４cm の茶褐色シルトの酸化層である。北側調査区の南部や南側調査区では、４・５層の堆積が確認されず、５層に対応すると考えられる酸化した黄灰色シルト（5'層）が４cm 程度の厚さで堆積している（基本土層 No.３）。６層は、厚さ約18cm の黄灰色シルト層で、その下の７層は灰色シルト層である。中世遺構の確認面は、北部で４層上面、中央部から南部で5'層上面である。



基本層序
1　砕石混じりの盛土層
2　砂質盛土層
3　黒褐色シルト
4　暗褐色シルト
5　茶褐色シルト
5'　黄灰色シルト
6　黄灰色シルト
7　灰色シルト

第４図　基本層序図（測定地点は第５図と対応）



第５図　願海寺城跡調査遺構全体図（S=1/400）

2．遺構

調査区は中央部を東西に横切る道路を挟んで北側調査区と南側調査区に分かれる。北側調査区では、北西部と南部に溝を中心として土坑と小ピットが検出されている。南側調査区では、北側調査区から続くとみられる溝と少数の土坑が検出されている。

（1）溝

全部で19条の溝を確認した。溝のなかには水流によりできたと考えられる浅いものや調査区外に延びているため、短く閉じて土坑になる可能性のあるものも含まれている。中世の城館に係わるような配置や掘り込み形状が認められる溝としては、SD01・09・11・12・17・18・19があり、これらを中心に記述していく。

SD01（第６図）北側調査区の南西部で検出した東西方向に延びる溝である。幅3.20m、深さ1.03m、長さ10.60m 以上あり、西側調査区外から延びて西端は土橋の手前で閉じている。底面は西側に向かって低くなり、土橋手前の最深部は、南側に向かって２カ所の土坑状の掘り返しの穴が開いている。その土坑（SK13A・13B）は SD01の最深部と連続するようにやや深く掘り込まれている。SD02・04・06と切り合っており、いずれの溝よりも新しい。本来 SD11と連続した溝であったものと思われる。遺物は、中世土師器皿、陶器、漆椀、下駄、曲げ物側板破片の他に櫛、木簡、箸、北宋銭などが出土している。

SD02（第６図）北側調査区の南西部で検出した南北方向に延びる溝である。幅1.05m、深さ0.02m、長さ2.90m 以上で、浅いために北端より先が確認できなくなっている。SD01に切られており、南側にある SD06と連続していた可能性が考えられる。遺物は、箸状木製品、北宋銭が出土している。

SD03（第６図）北側調査区の南西部で検出した東西方向に延びる溝である。幅1.30m、深さ0.30m、西側調査区外から東へ1.60m 程延びてすぐに閉じている。遺物は出土していない。

SD04（第６図）北側調査区の南西部で検出した南北方向に延びる溝である。幅1.30m、深さ0.51m、南側調査区外から6.00m 延びて SD01に切られている。遺物は出土していない。

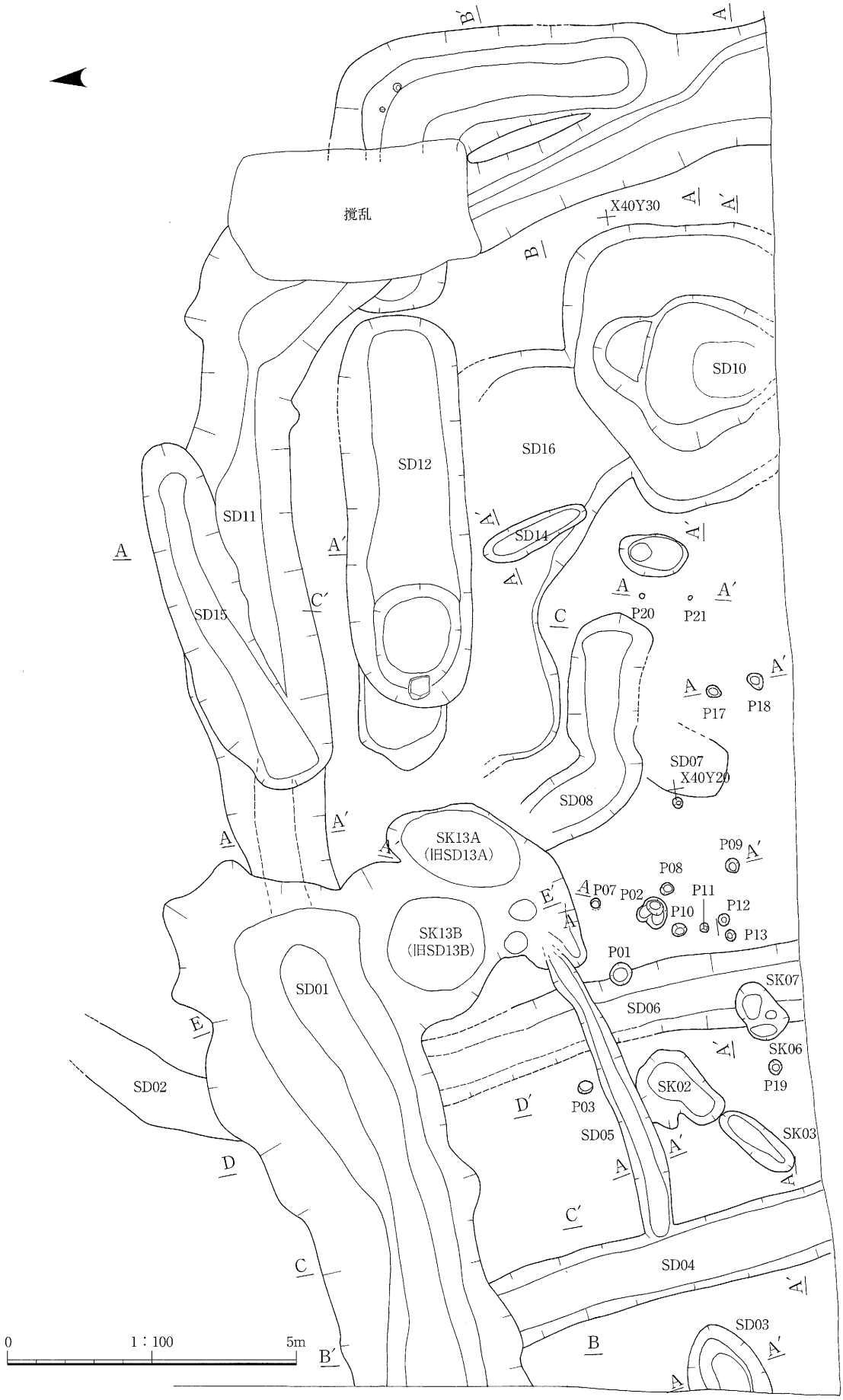
SD05（第６図）北側調査区の南西部で検出した東西方向に延びる溝である。幅0.62m、深さ0.43m、長さ5.20m、SD04の西壁から始まって東へ向かい、SD01の南東部に掘られた土坑に向かって傾斜して延びている。遺物は出土していない。

SD06（第６図）北側調査区の南西部で検出した南北方向に延びる溝である。幅1.30m、深さ0.19m、南側調査区外から6.54m 延びて SD01に切られている。遺物は南端部の覆土中から漆椀の小皿が出土している。

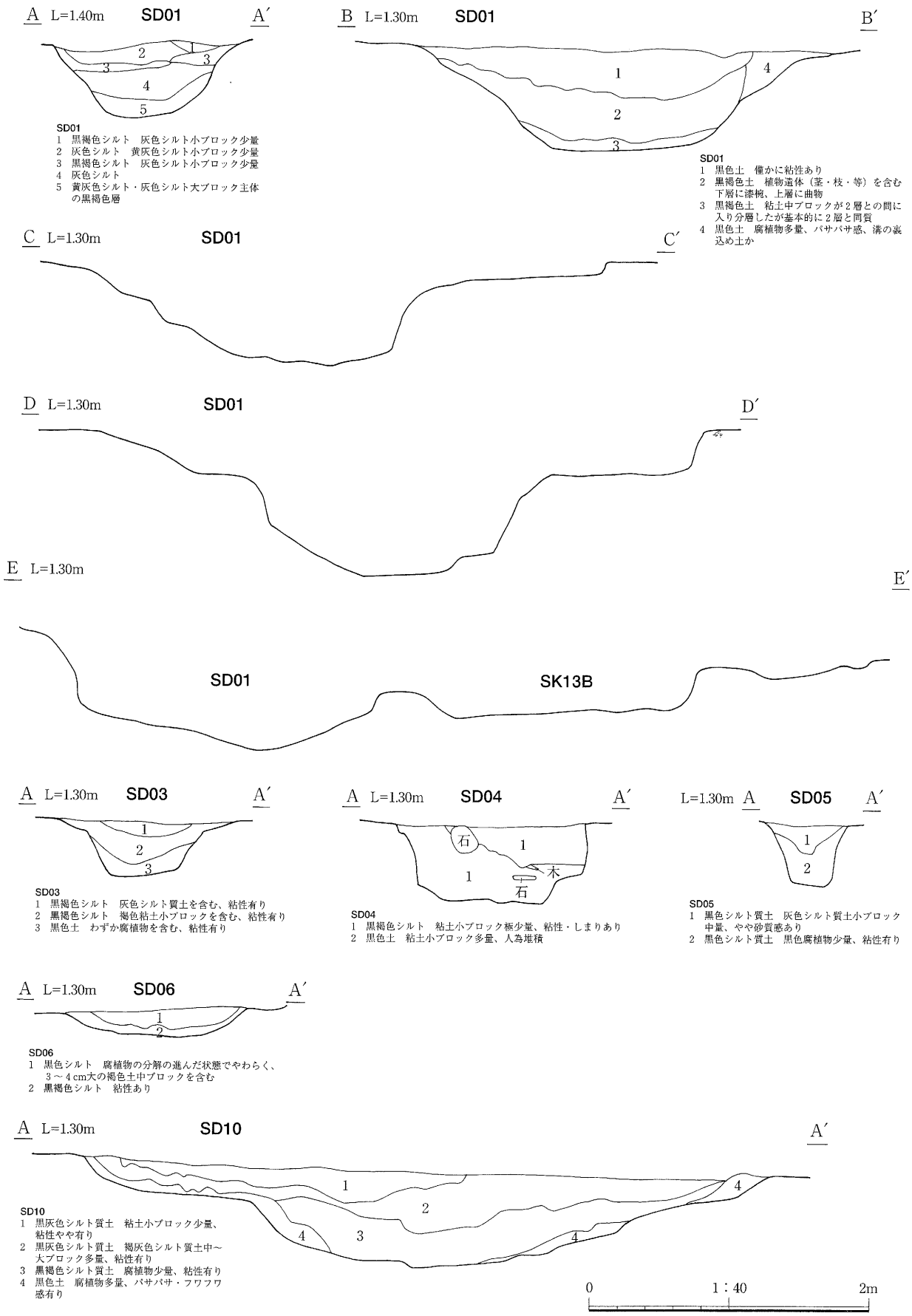
SD09（第10図）北側調査区の南東部で検出した溝である。南側調査区外から北に向かって直線的に13.00m 程延びて、東側調査区外で西に直角に折れ、10.60m 程西に延びて終わっている。覆土の堆積は、１層が粘土ブロックを大量に含んだ堆積土で、埋め戻しが行われている。規模は南北方向の溝が幅1.80m、東西方向の溝が幅0.85m で深さ0.70m である。遺物は南北方向の溝から曲物底板が、東西方向の溝底面から折敷、下駄が出土している。

SD10（第６図）北側調査区の南端中央部で検出した南北方向に延びる溝である。上幅5.00m、二段になった下段幅2.20m、深さ0.66m を測り、南側調査区外から3.00m 延びて北側に向かって閉じている。遺物は覆土中から越中瀬戸小瓶の口縁や不明木製品が出土している。

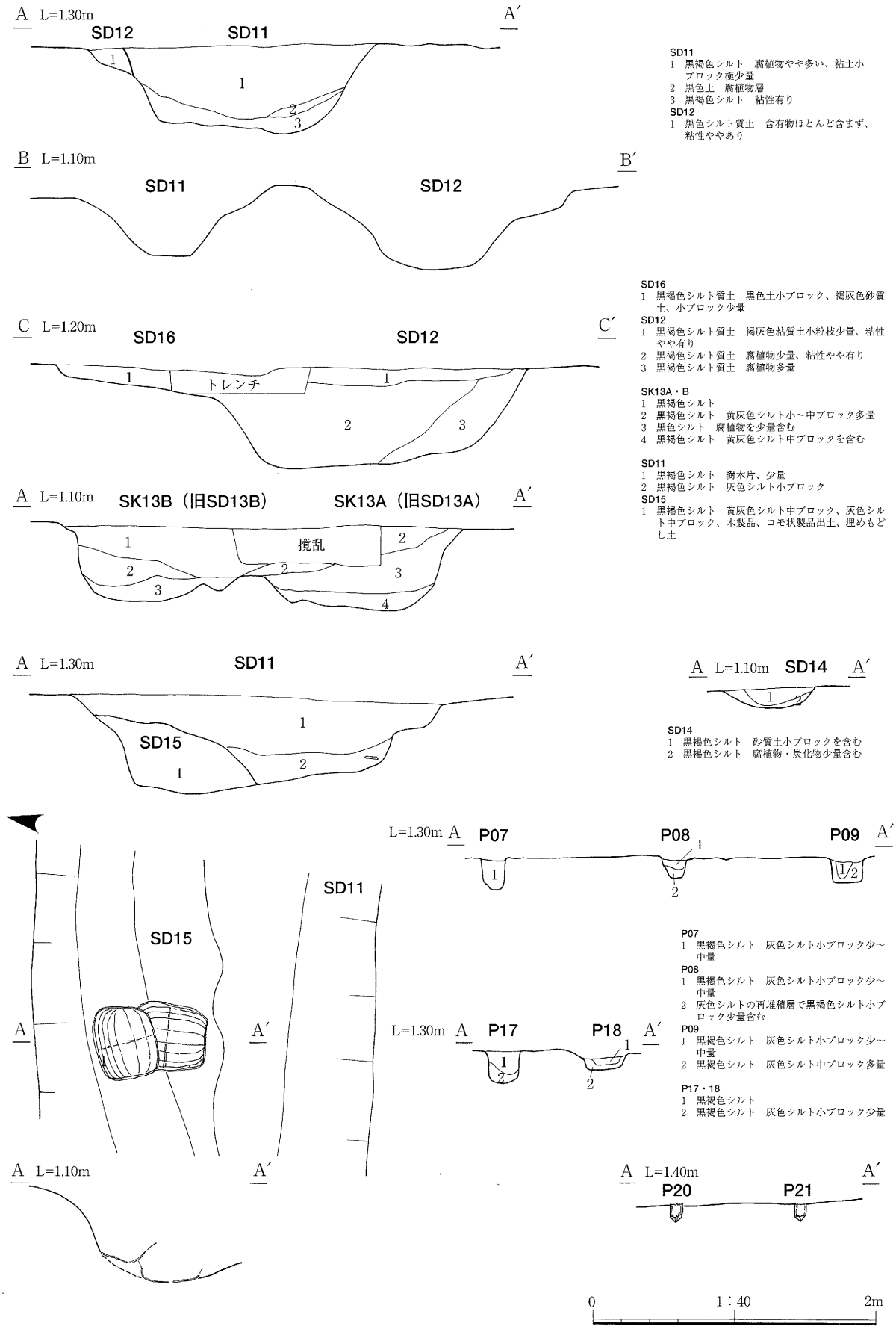
SD11（第６図）北側調査区の南部で検出した溝である。幅3.40m、深さ0.71m、南側調査区外から北西に延びて途中で西に折れ、東端は土橋の手前で閉じている。北東の隅部で底面がやや浅くなり、折れ角も緩やかな角度である。SD12・15と切り合っており、SD15よりも新しく、SD12の再度掘り直



第６図　SD01～16平面図



第7図　SD01・03～06・10土層断面・エレベーション



SD11
1 黒褐色シルト　腐植物やや多い、粘土小ブロック極少量
2 黒色土　腐植物層
3 黒褐色シルト　粘性有り
SD12
1 黒色シルト質土　含有物ほとんど含まず、粘性ややあり

SD16
1 黒褐色シルト質土　黒色土小ブロック、褐灰色砂質土、小ブロック少量
SD12
1 黒褐色シルト質土　褐灰色粘質土小粒枝少量、粘性やや有り
2 黒褐色シルト質土　腐植物少量、粘性やや有り
3 黒褐色シルト質土　腐植物多量

SK13A・B
1 黒褐色シルト
2 黒褐色シルト　黄灰色シルト小～中ブロック多量
3 黒色シルト　腐植物を少量含む
4 黒褐色シルト　黄灰色シルト中ブロックを含む

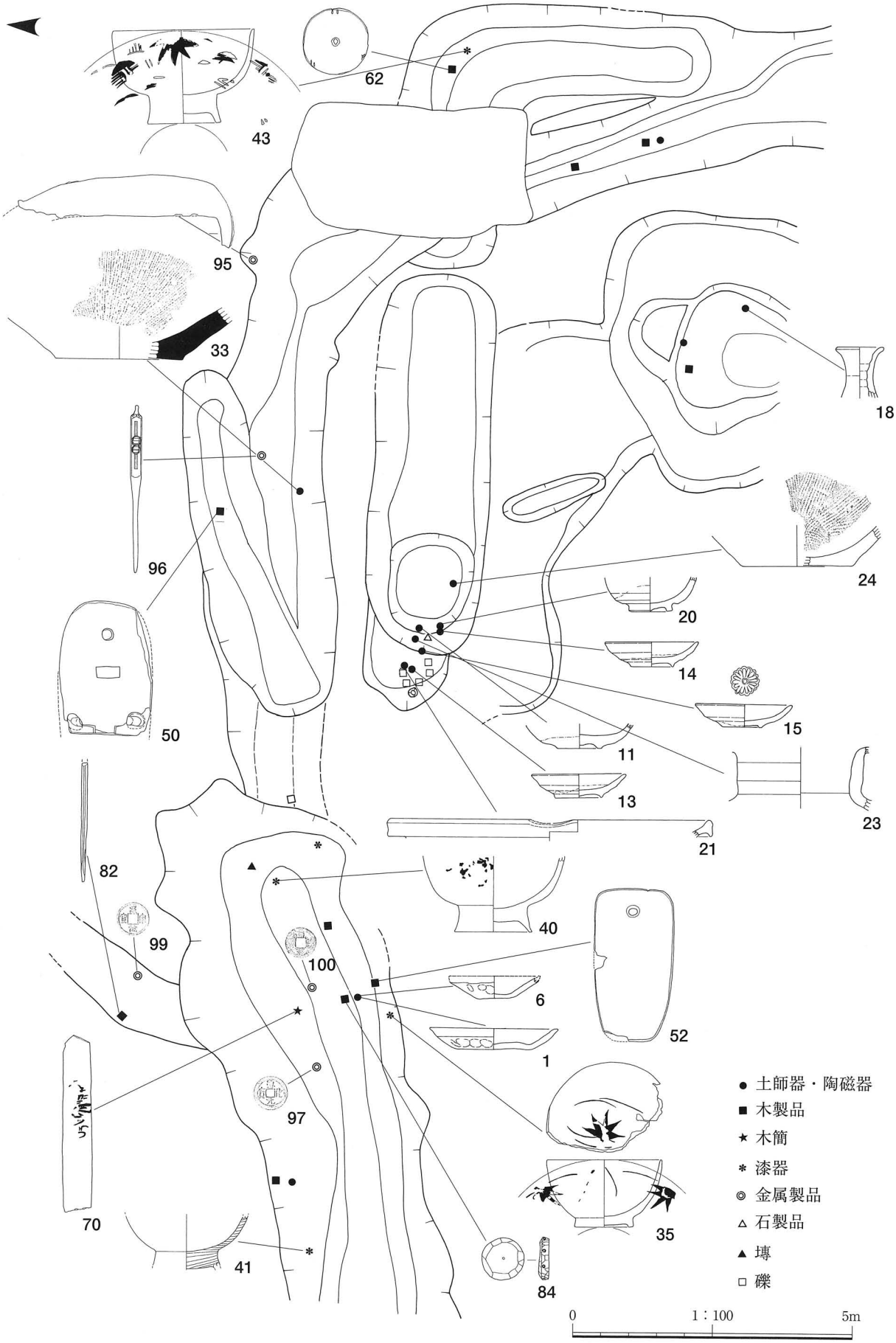
SD11
1 黒褐色シルト　樹木片、少量
2 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック
SD15
1 黒褐色シルト　黄灰色シルト中ブロック、灰色シルト中ブロック、木製品、コモ状製品出土、埋めもどし土

SD14
1 黒褐色シルト　砂質土小ブロックを含む
2 黒褐色シルト　腐植物・炭化物少量含む

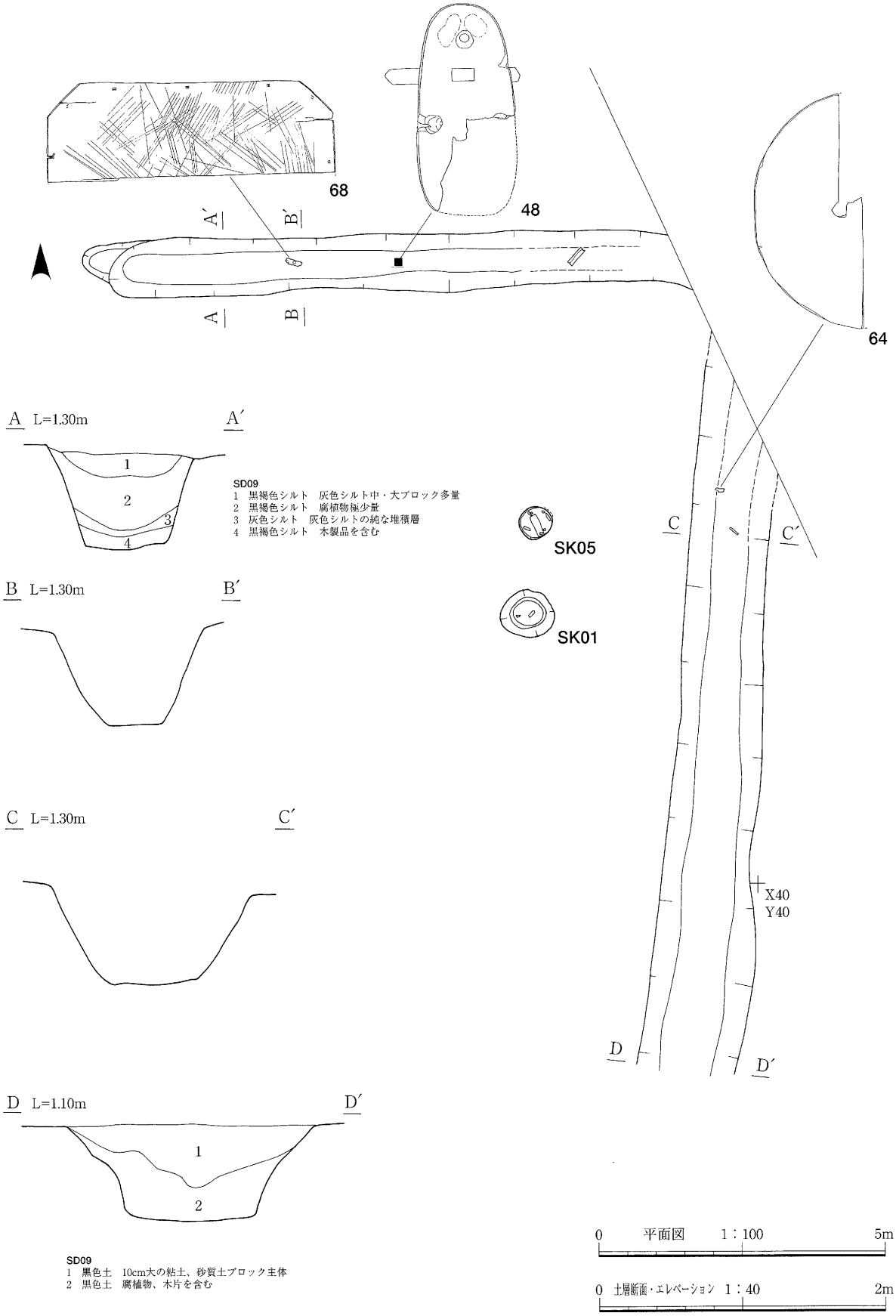
P07
1 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック少～中量
P08
1 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック少～中量
2 灰色シルトの再堆積層で黒褐色シルト小ブロック少量含む
P09
1 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック少～中量
2 黒褐色シルト　灰色シルト中ブロック多量

P17・18
1 黒褐色シルト
2 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック少量

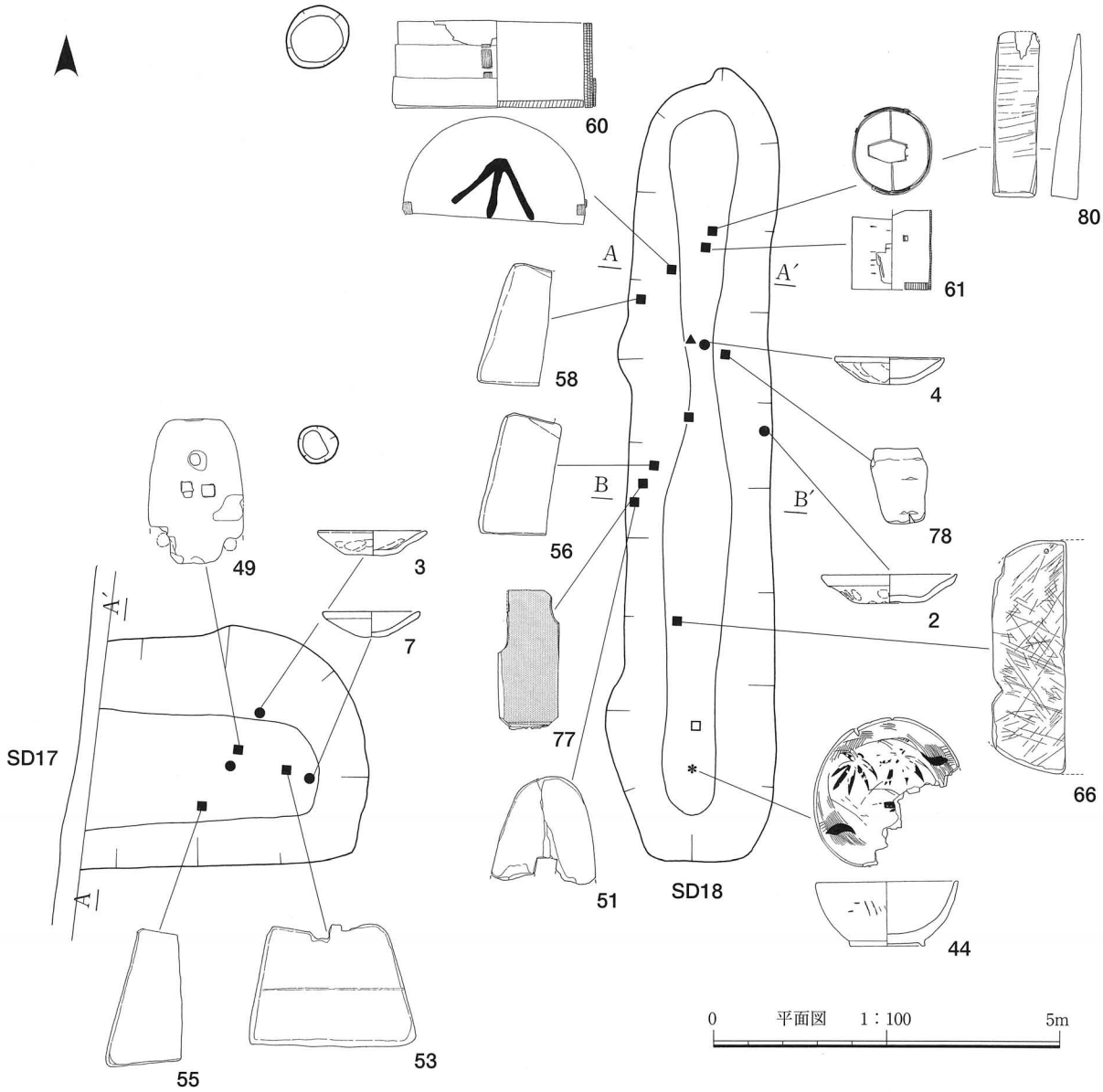
第8図　SD11・12・15・16、P7～9・17・18・20・21土層断面・エレベーション

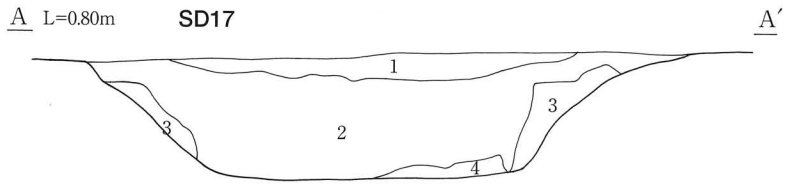


第９図　SD01～16遺物出土状況図

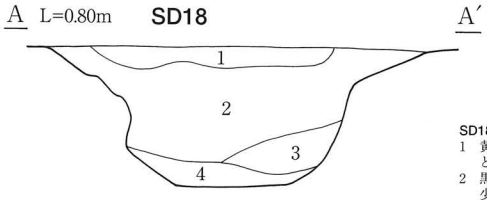

68
48
64
A′
B′
A
B
A L=1.30m
A′
1
2
3
4
SD09
1 黒褐色シルト 灰色シルト中・大ブロック多量
2 黒褐色シルト 腐植物極少量
3 灰色シルト 灰色シルトの純な堆積層
4 黒褐色シルト 木製品を含む
B L=1.30m
B′
C L=1.30m
C′
D L=1.10m
D′
1
2
SD09
1 黒色土 10cm大の粘土、砂質土ブロック主体
2 黒色土 腐植物、木片を含む
SK05
SK01
C
C′
X40
Y40
D
D′
0 平面図 1：100 5m
0 土層断面・エレベーション 1：40 2m

第10図 SD09

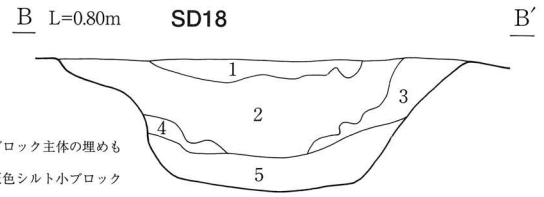




SD17
1 黒褐色シルト　黄灰色シルト中・大ブロック多量
2 黒褐色シルト　腐植物やや多い
3 黒褐色シルト　黄灰色シルト小ブロック少～中量、裏込め土か
4 黒褐色シルト　黄灰色シルト中・大ブロック中量



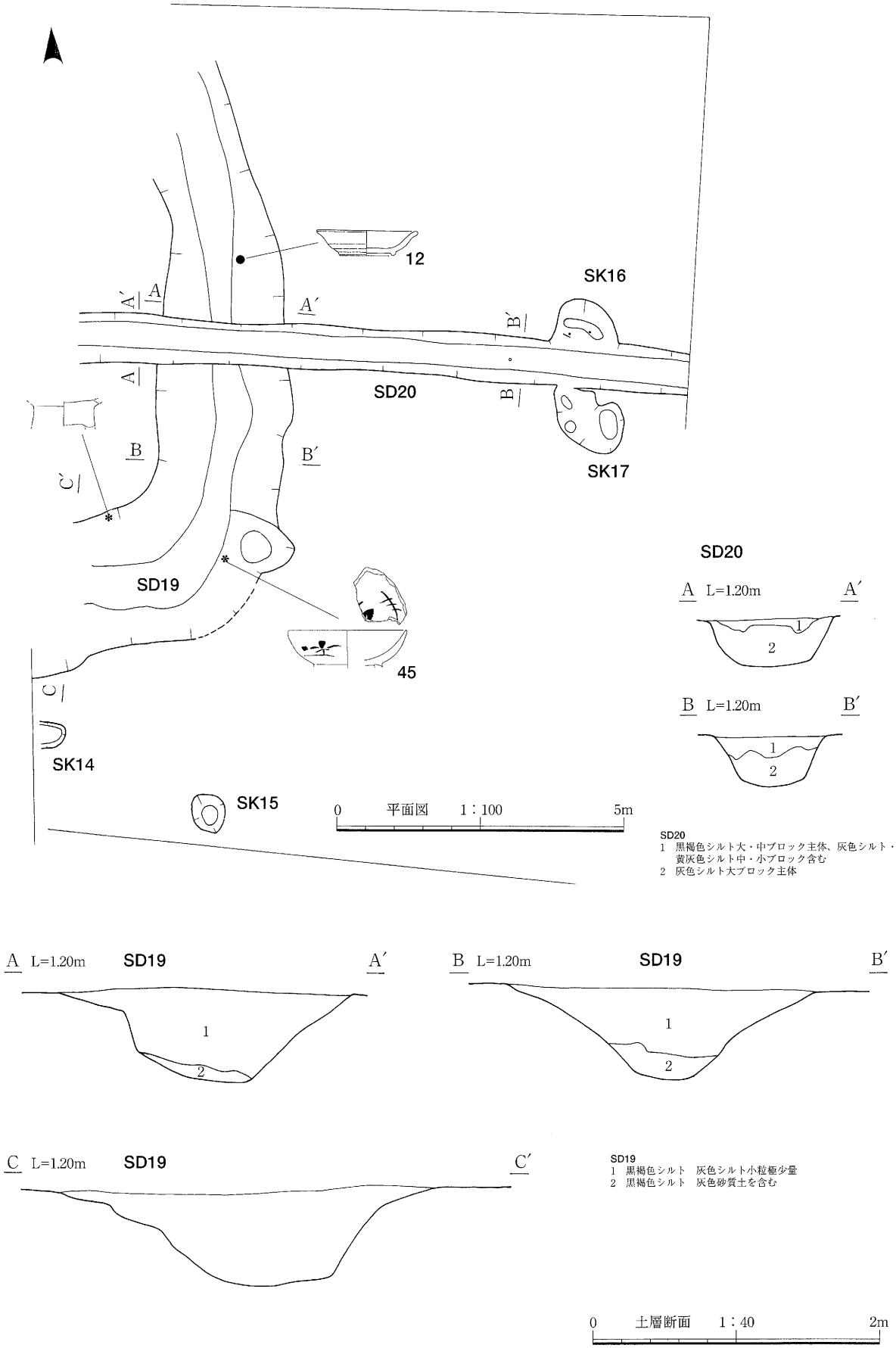
SD18
1 黒褐色シルト　黄灰色シルト中・大ブロック多量
2 黒褐色シルト　灰色シルト小ブロック下層に極少量
3 黒褐色シルト　灰色シルトの２次堆積層
4 黒褐色シルト　腐植物少量



SD18
1 黄灰色シルト中大ブロック主体の埋めもどし土
2 黒褐色シルト　黄灰色シルト小ブロック少量
3 黒褐色シルト
4 黒灰色シルト　黒色腐植物を含む、木製品を含む
5 黄灰色シルト

0　土層断面　1：40　2m

第11図　SD17～18


12
SK16
A
A′
B′
SD20
B
B′
C′
SK17
SD19
45
C
SK14
SK15
0 平面図 1：100 5m
SD20
A L=1.20m A′
1
2
B L=1.20m B′
1
2
SD20
1 黒褐色シルト大・中ブロック主体、灰色シルト・黄灰色シルト中・小ブロック含む
2 灰色シルト大ブロック主体
A L=1.20m SD19 A′
1
2
B L=1.20m SD19 B′
1
2
C L=1.20m SD19 C′
SD19
1 黒褐色シルト 灰色シルト小粒極少量
2 黒褐色シルト 灰色砂質土を含む
0 土層断面 1：40 2m

第12図 SD19・20

しをしている部分よりは古いものと考えられる。土橋の部分は、本来SD11がSD01と連結していた部分で、人為的な埋め戻しが行われている。遺物は、珠洲、曲げ物底板などが覆土中から出土し、北東隅部外側斜面からは、鉄鎌が刃を上向きにして埋め込まれた状態で出土している。

SD12（第６図）北側調査区の南部で検出した溝である。幅1.05m、深さ0.71m、南側調査区外から北に延びて途中でほぼ直角に西へ折れ、東端は土橋の南東部で閉じている。浅い部分と再度掘り直した深い部分があり、深い部分は中央部で括れて東側の角を持った溝と西側の東西方向に延びる長さ6.80mの溝に分かれる。SD11と切り合っており、調査区南壁近くの土層断面観察では、SD12の浅い部分はSD11の方が新しい。SD12を掘り直しをしていると思われる溝の深い部分は、SD11を意識して掘り込んでおり、SD11よりも新しいものと思われる。遺物は、西側の溝で越中瀬戸、唐津、礫、礎石状の板石が出土し、東側の溝では隅部から漆椀や曲げ物底板などが出土している。SD12の西端の浅い溝の先端には、別の浅い土坑状の穴がある。底面中央部が15cm程浅く窪んでおり、周辺には拳大の礫が散っている。礎石状の板石が、SD12の最も西端部の斜面にずれ落ちるようにして出土していることから、本来はSD12西側の浅い窪穴にあった可能性が考えられる。この窪穴内には栗石状のものが数点見られることから礎石の据え付け穴の可能性がある。

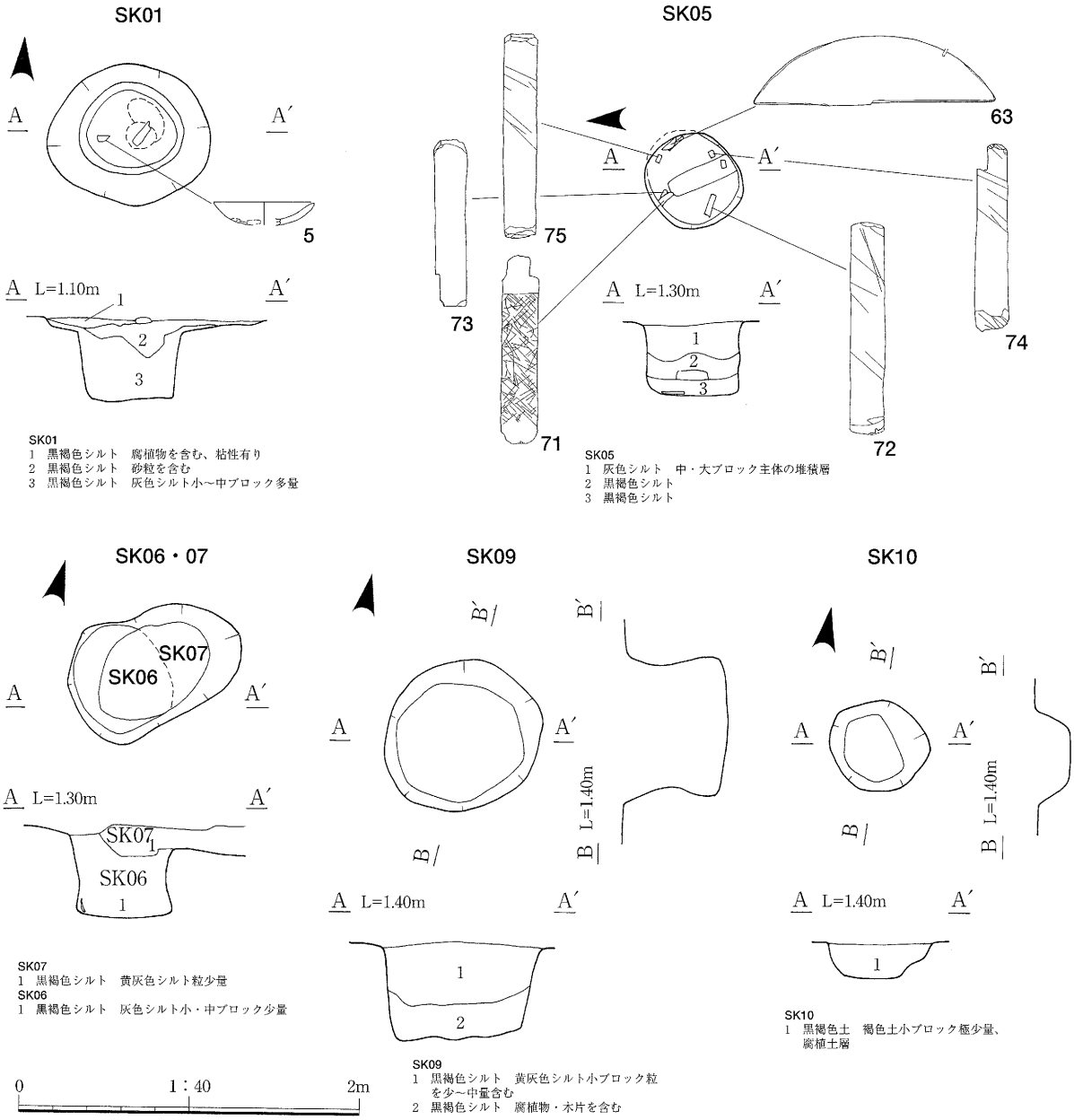
SD15（第６・８図）北側調査区の南部で検出した東西方向に延びる溝である。長さ6.40m、上幅1.15m、深さ0.70mを測る。SD11と切り合っており、SD11よりも古い。覆土は、人為的な堆積で、一部俵を使用して埋め戻している。遺物は覆土中から木製品の下駄、底面から折り曲げられた笄が出土している。

SD17（第11図）北側調査区の北西部で検出した東西方向に延びる溝である。上幅3.20m、深さ0.64mを測る。調査区外西側から東へ4.00m程延びて閉じている。SD18とは3.60mの間隔を開けてＬ字形に配置されている。遺物は中世土師器の小皿、木製品の下駄が出土している。

SD18（第11図）北側調査区の北部で検出した南北方向に延びる溝である。長さ11.47m、上幅2.40m、深さ0.70mを測る。遺物は覆土中から土師器の小皿、木製品の下駄、曲物、漆椀が出土している。

SD19（第12図）南側調査区の西部で検出した溝である。上幅2.43m、深さ0.65mを測る。北側調査区外から南に延び、途中で西側に折れて西側調査区外へ延びている。遺物は覆土中から土師器の小皿、越中瀬戸丸皿、漆椀、桃の種実とみられる種実遺体が出土している。

SD20（第12図）南側調査区の中央部で検出した東西方向に延びる溝である。上幅0.83m、深さ0.34mを測る。調査区を東西に横切って延びている。SD19と切り合っており、SD20の方が新しい。覆土はブロック混じりの堆積土で、溝の埋め戻しが行われている。遺物は覆土中から陶器片が出土している。



第13図　SK01・05・06・07・09・10

（2）土坑（第13図）

土坑は、全部で25基検出されている。内径が50cm 前後で円筒状に掘り込んだような、形態の明確なものはSK01・05・06・09・10の5基である。他の土坑は、木根跡のような不整形のものや、溝の最深部が残ったような細長く浅いものもある。

（3）小ピット

19基検出されている。ほとんどのピットはSD01・11で囲まれた区域内から検出されている。ピット相互の配置関係は捉えられなかった。19基の内3基は打ち込まれた木杭が残っていた。

3．遺物

出土遺物には戦国時代末から安土桃山時代頃の土師器、珠洲、越前、青磁、唐津、越中瀬戸、漆器、木簡、木製品、砥石、石臼、塼、銅銭、笄等がある。

土師器（1～7） すべて非ロクロ成形の皿で7点出土している。大きさは口径13.8cmの大型、11.6cmの中型、8.4～9.4cmの小型の3種類ある。口縁部の形態では、全体に先端に向かって薄くなるものが主体である。口縁端部については丸いもの（5）、口縁端部をつまみ上げるもの（2～4）、口縁端部内面が浅く窪むもの（1・7）がある。小型で口縁端部の丸い5と端部をつまみ上げた3・4は、灯明皿として使用されている。1・2・6は平底化している。

珠洲（26～34） 26・27は小型の壷、28～31は甕、32・33は擂鉢である。34は珠洲甕の底部片を利用した転用硯で、墨痕が見られる。

越前（23） 壷の口縁部が出土している。頸部は直立し、口縁部で強く短く外反する器形で、16世紀後半代に見られる器形である。

青磁（8～10） 3点出土している。このうち8・9はいずれも貫入の入った透明度のある薄緑色釉で同一個体の可能性がある。8の青磁碗底部は、見込に陰印刻の花文が入る。高台外面の途中まで釉が掛かっており、上田氏による高台周辺の釉の処理方法による分類（上田 1982）のd類（15世紀後半～16世紀前半）にあたる。8は破断面に一部黒色付着物が見られ、漆を使用した補修痕とみられる。10は貫入の入った薄緑色透明釉の掛かった青磁碗で、体部外面の口縁部寄りに圏線が入る。

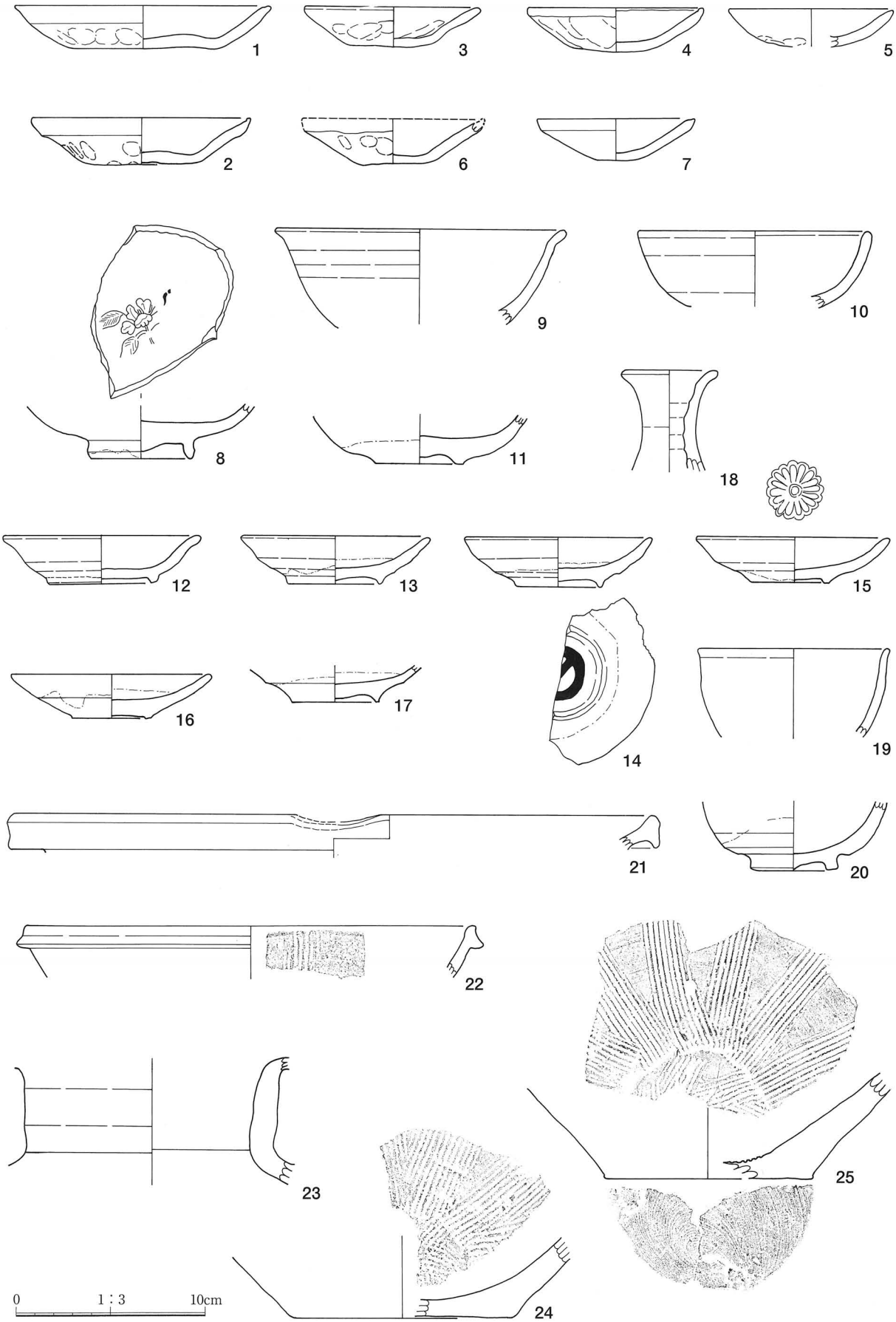
唐津（11） 丸皿の底部が1点出土している。高台から口縁部方向に向かって緩やかに彎曲した体部を持ち、釉は細かな貫入の入った灰緑色の灰釉で、還元状態で焼成されている。高台内には円錐状の突出した削り残しがみられ、畳付には窯詰めの際に付着したとみられる籾殻の痕跡も残る。盛氏編年（盛 2000）のⅠ－1期（1580年～1594年頃）の時期のものと見られる。

越中瀬戸（12～22・24・25） 丸皿、丸碗、瓶、擂鉢が出土している。12の丸皿は付高台で、暗茶褐色の鉄釉が掛かる。13・14・17は付高台の内ハゲ丸皿である。13・14は灰釉掛けで口縁部が少し外反する。14の外面高台内には「㊀」の墨書がある。15・16は削り出し高台の丸皿で、15は見込みに印花を持ち、釉は鈍く光る暗灰色の鉄釉掛け、16は内ハゲでサビ釉が掛かる。18の瓶の口縁部は鉄釉地に灰釉が掛かる。19・20は鉄釉掛けの丸碗である。21・22・24・25は全体にサビ釉を掛けた擂鉢である。21の擂鉢口縁部は口縁部の縁帯が垂下し、22は縁帯を外方につまみ出している。

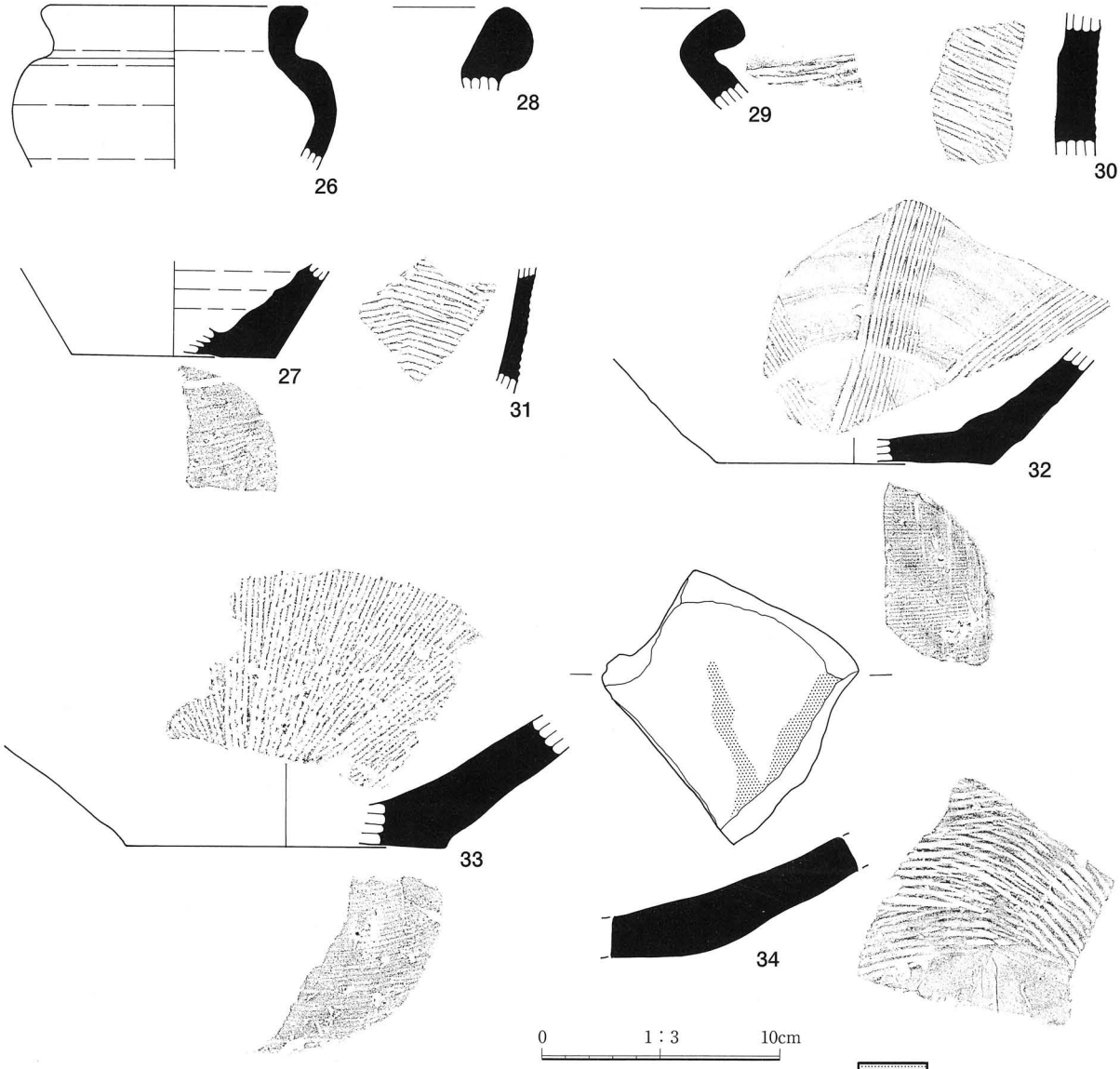
漆器（35～47） 漆製品は、椀（35～45）、皿（46・47）がある。35は総黒漆の椀で、内外面に赤色漆で紅葉文が描かれている。底部はやや厚手で、高台は低めである。体部は小振りで全体に丸みを持って立ち上がる。樹種はブナ属である。36は外面が黒漆で内面が赤漆の椀である。外面には赤色漆絵が描かれている。体部は全体に丸身を持ち、口縁部に向かって垂直に立ち上がる。樹種はブナ属である。37・38は総黒漆地で内外面に赤色漆絵が描かれている。39は総黒漆地で内面に赤色で葉のような文様が描かれている。40～43は高台の高い椀で、40は総黒漆地で内外面に赤色漆による文様痕跡がある。底部は厚く、体部は下方で丸みが強く、口縁部はほぼ直立する。41は外面黒漆、内面赤漆で、樹種はブナ属である。43も40と似た器形の総黒漆の椀で、外面と内面見込み部に赤色漆絵を描いている。

44・45は総黒漆塗りの椀で、内外面に赤色漆絵を描いている。44は低い輪高台で、内面に紅葉文と簡略化した鶴を描いている。46・47は総黒漆塗りの皿で、高台が低く、46は内面見込みに、47は内面と外底面に赤色漆絵が描かれている。樹種は、46がトチノキで他はブナ属である。

下駄（48～59） 下駄は、露卯下駄（48～51）と雪下駄（52）が出土している。48は長円形で、最大幅が横緒穴付近にあり、歯を装着するための柄穴が1穴ずつ開いている。樹種はモクレン属である。



第14図　遺物実測図（1）

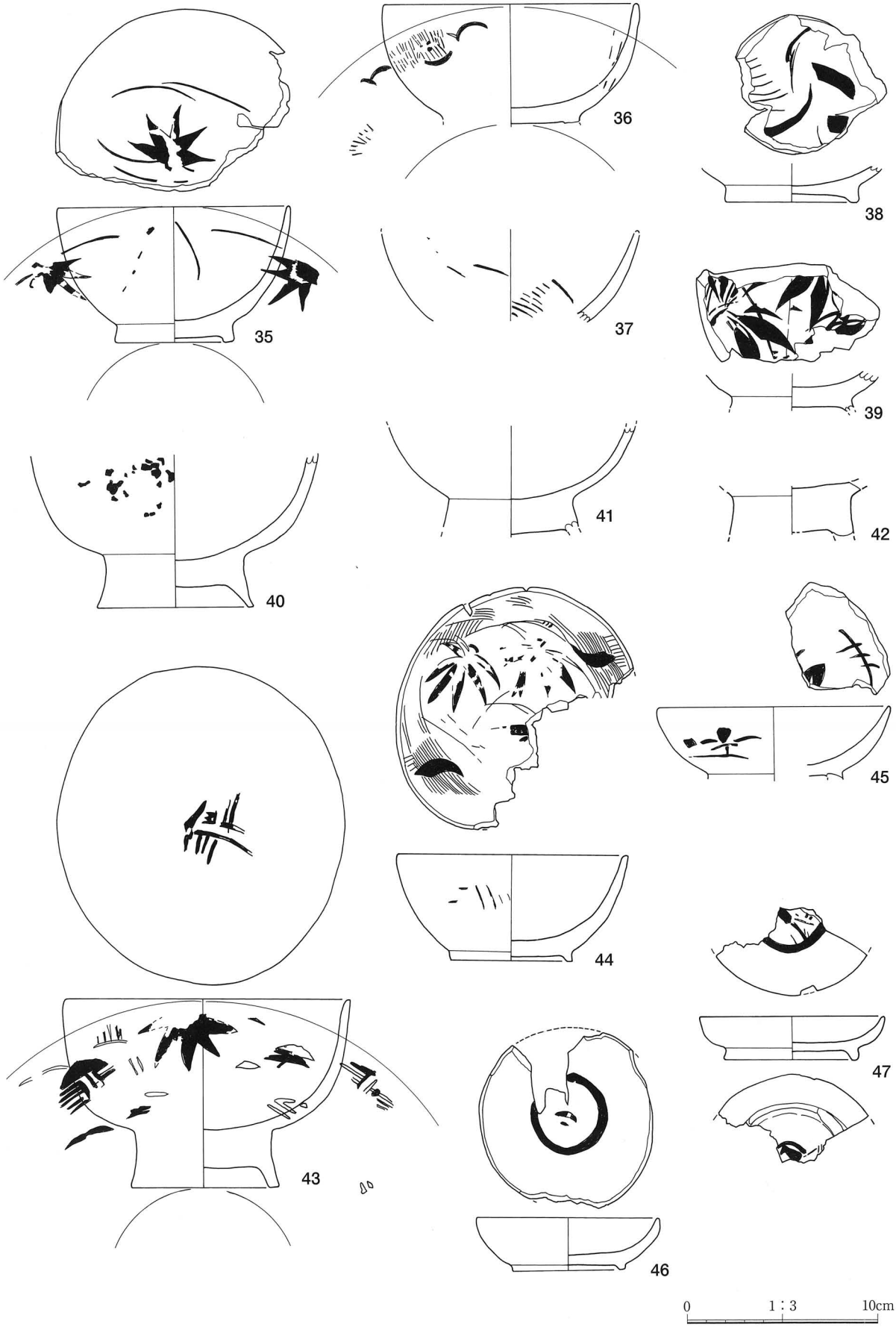


第15図　遺物実測図（２）

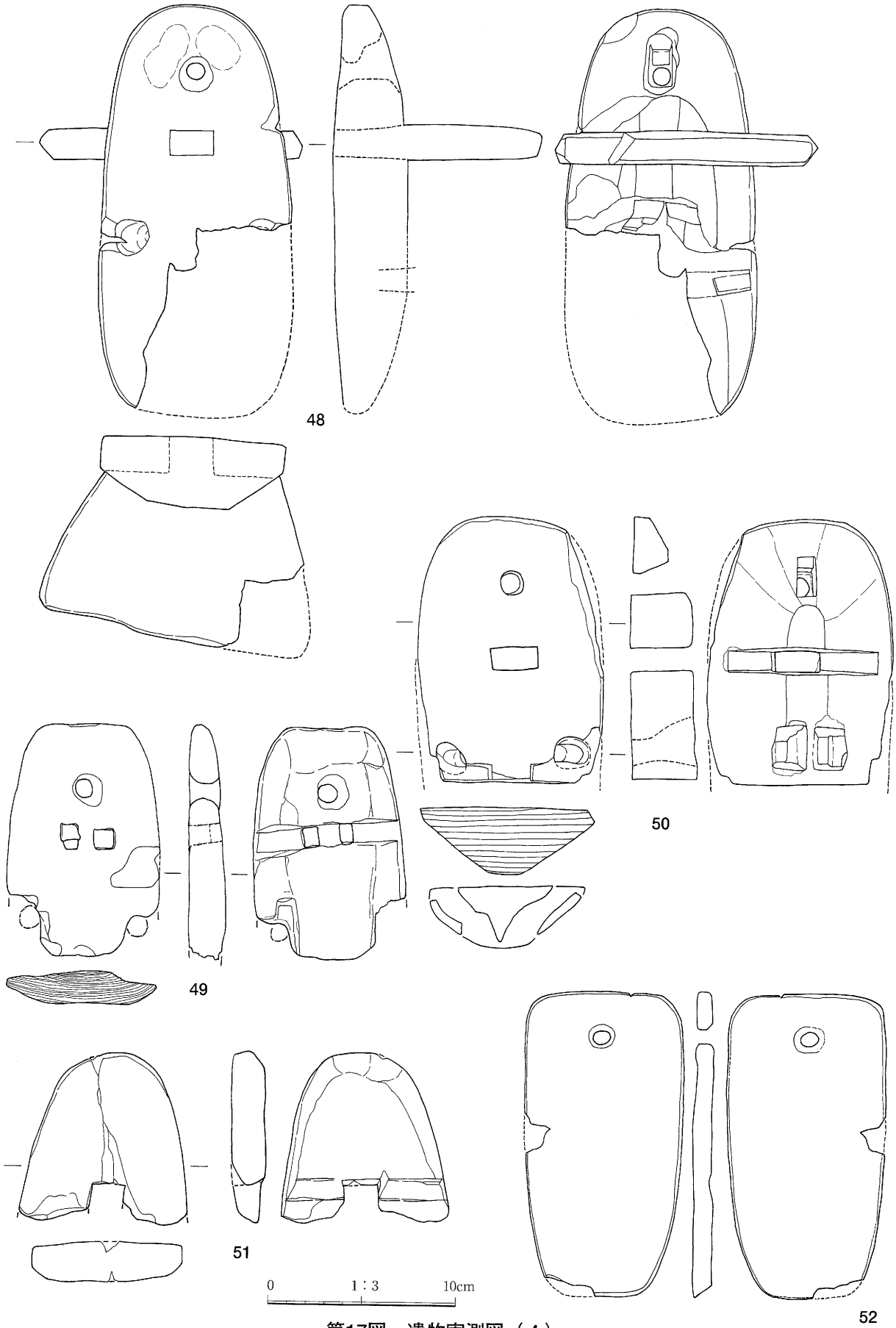
49・50は最大幅が中央にあり、柄穴は49が前歯の位置に２カ所開いている。49の樹種は台がサワグルミで、歯はブナ属である。53～59は露卯下駄の歯で、台形の形をした差し口の柄が１つのもの（54）と２つのもの（53）がある。53の樹種はクリで、54はモクレン属である。

曲物（60～67）　曲物容器は、径17.5cm で底板底面に墨書（記号か）が記されたもの（60）、径7.6cm と小型で底板の中央に長六角形の切り込み穴があくもの（61）が出土している。60の曲物容器は、下端がタガで締められ、タガには２カ所の綴皮留がある。側板には綴皮留１カ所と補修のための綴皮留が１カ所ある。61の小形曲物容器は側板の綴じ合わせ痕が上半に４カ所、下半に１カ所あり、一部綴じ皮が残っている。曲物底板は、63～66は推定径20.2～25.6cm、62は径7.2cm の小形品である。62の小形の底板は、中央部に小さな穿孔があり、周縁の３方向に綴皮留痕が残る。63～65の底板側面には目釘穴が１カ所ずつ開いている。67は曲物容器の側板として使われていたヘギ板と思われ、短辺側に接着材の痕跡と綴皮留孔が開いている。

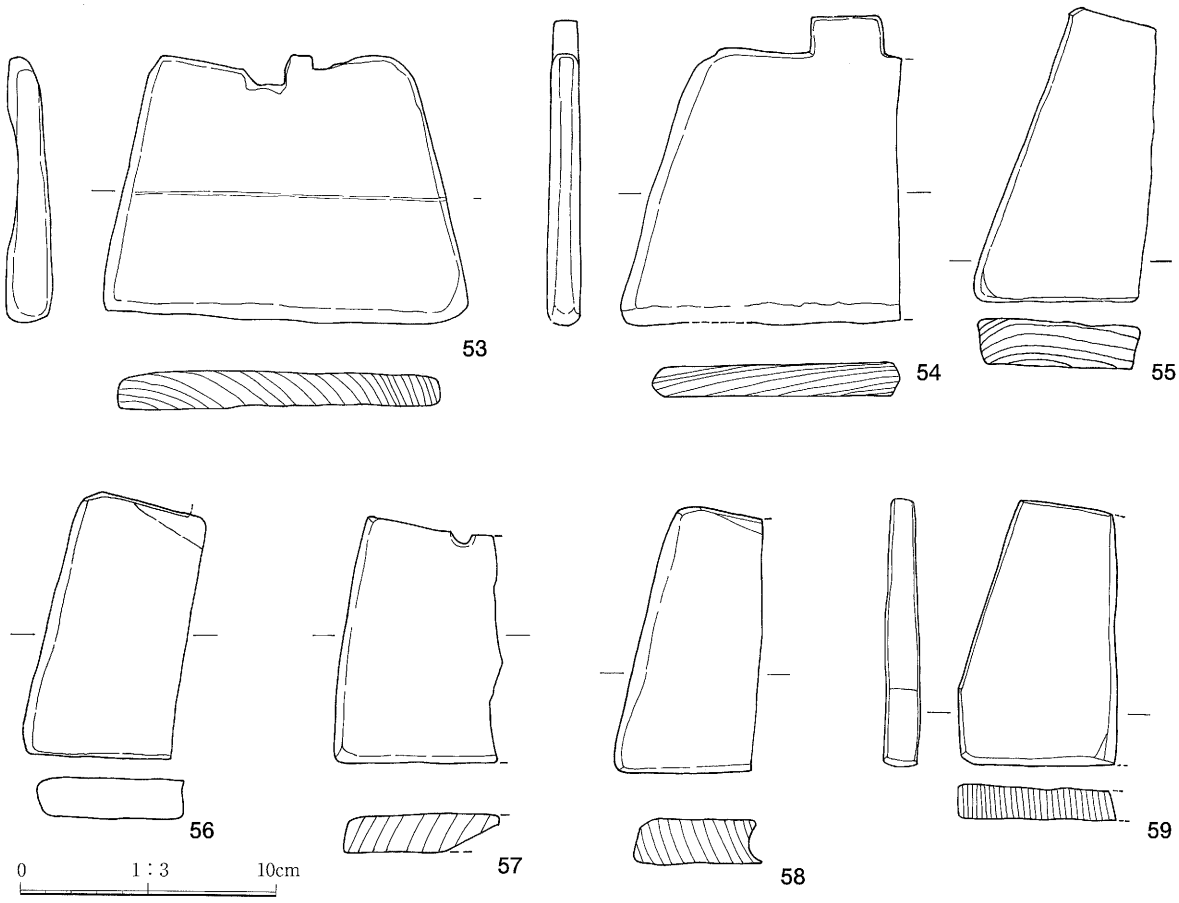
その他の木製品（68～89）　その他の木製品には、折敷・木簡・櫛・箸・陽物・木杭・その他加工材



第16図　遺物実測図（3）



第17図　遺物実測図（４）

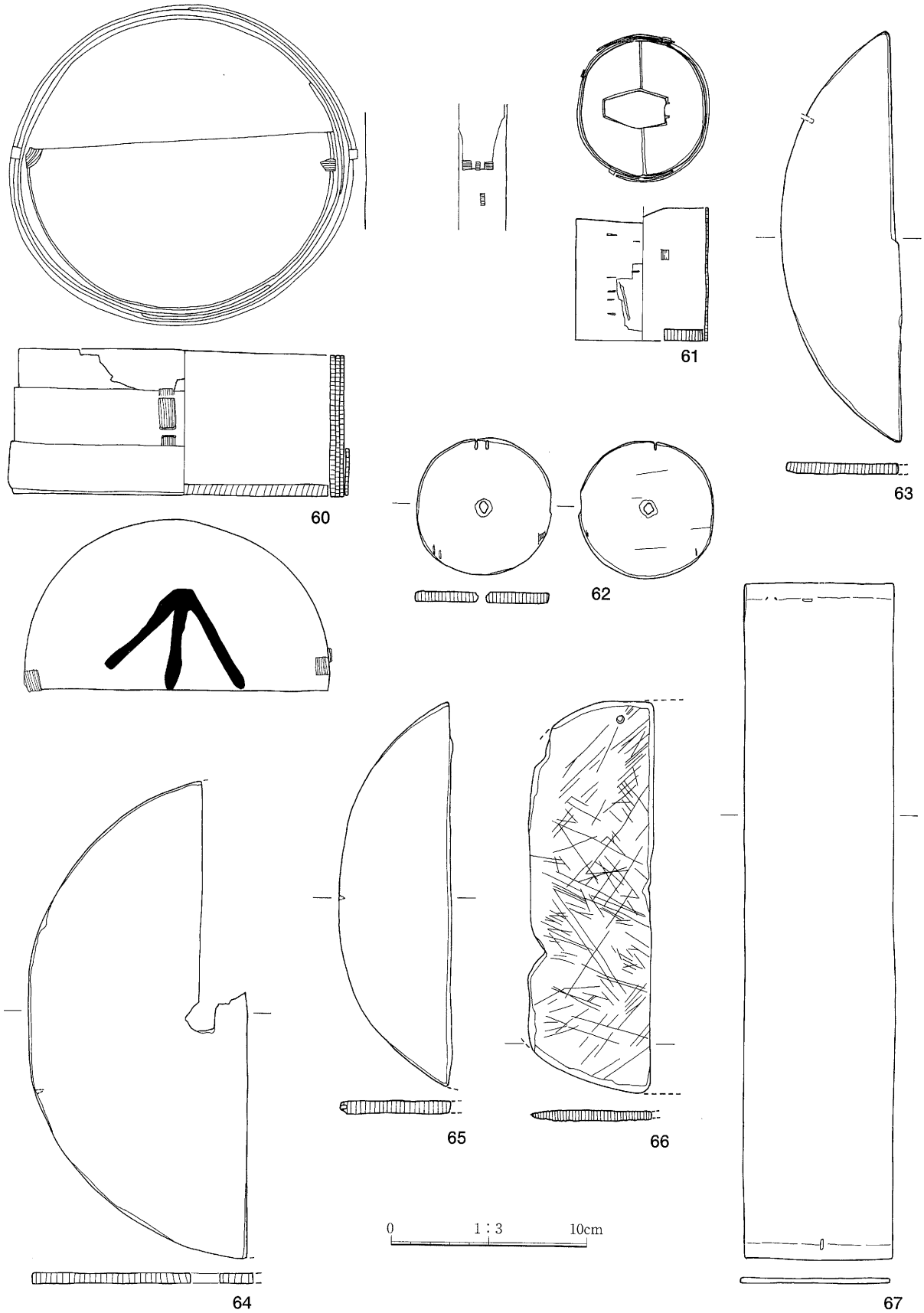


第18図　遺物実測図（5）

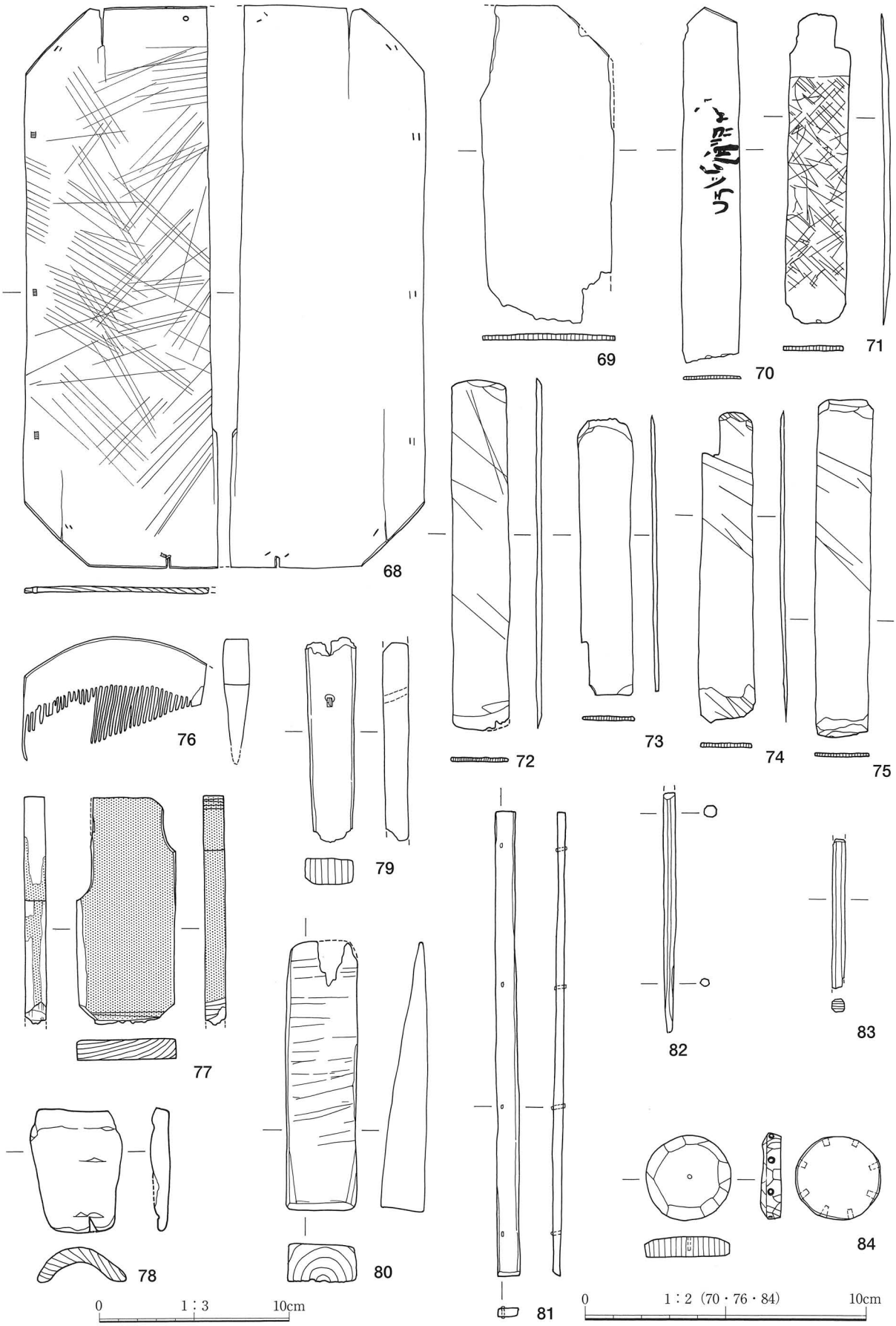
や不明木製品がある。68・69は折敷である。68は折敷の底板で、周縁部に目釘穴と綴じ皮が残る。片面には刃物痕が残り、最利用されている。70は木簡である。上端を三角に加工した長方形の薄板で、判読できないが墨書文字が見られる。樹種はスギである。71～75は端部に加工痕のある薄板で、刃物痕のあるものもある。76はネジキ材でできた解櫛である。77～81は用途不明の部材である。77は墨塗りで丁寧な加工がされている。78は木製容器の破片のような曲面の加工が施されている。81は細い長方形の板材で、12.8cm 間隔に 4 カ所釘孔が開き、木釘が残存している。82・83は箸状木製品である。82の樹種はアスナロ属である。84は円盤状の木製品である。片面の周縁部を面取りし、中央部に径 1 mm、深さ 4 mm の穴が開けられ、側面には等間隔に 8 カ所の釘孔が開いている。85は陽物形木製品で、割材を切り、部分的に削り込んで仕上げている。クリ材を使用している。86は長さ84cm 程の板材で両面に刃物痕が多数見られる。87は棒状の加工材である。88・89は木杭で、表面には樹皮が残り、下端は尖頭に削っている。

石製品（90～93）　砥石（90・91）、石臼（92）、礎石（93）が出土している。90は、長方体の長い 4 面の内 3 面を使用しており、途中で破損している。91はやや大きな直方体の砥石が折損した後に 3 面使用している。92は砂岩製の石臼の上臼である。遺存状態が悪く、目は残っていない。93は砂岩製の礎石と考えられる。板状の自然石の中央部を径13.0cm、深さ3.5cm 程掘り窪めている。

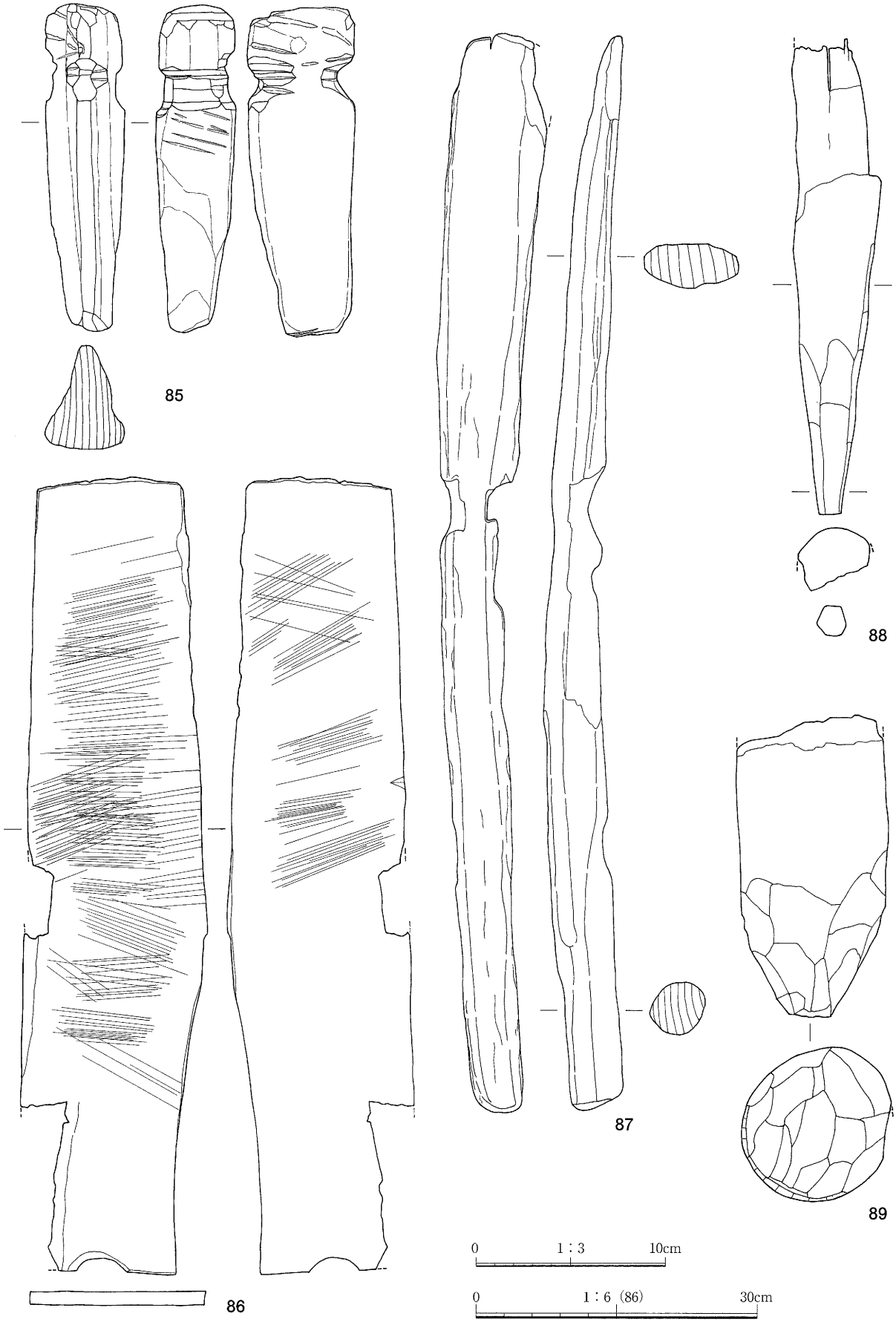
土製品（94）　94は塼である、幅7.6cm、厚さ4.7cm の直方体で途中で折れ、現存長9.0cm を測る。



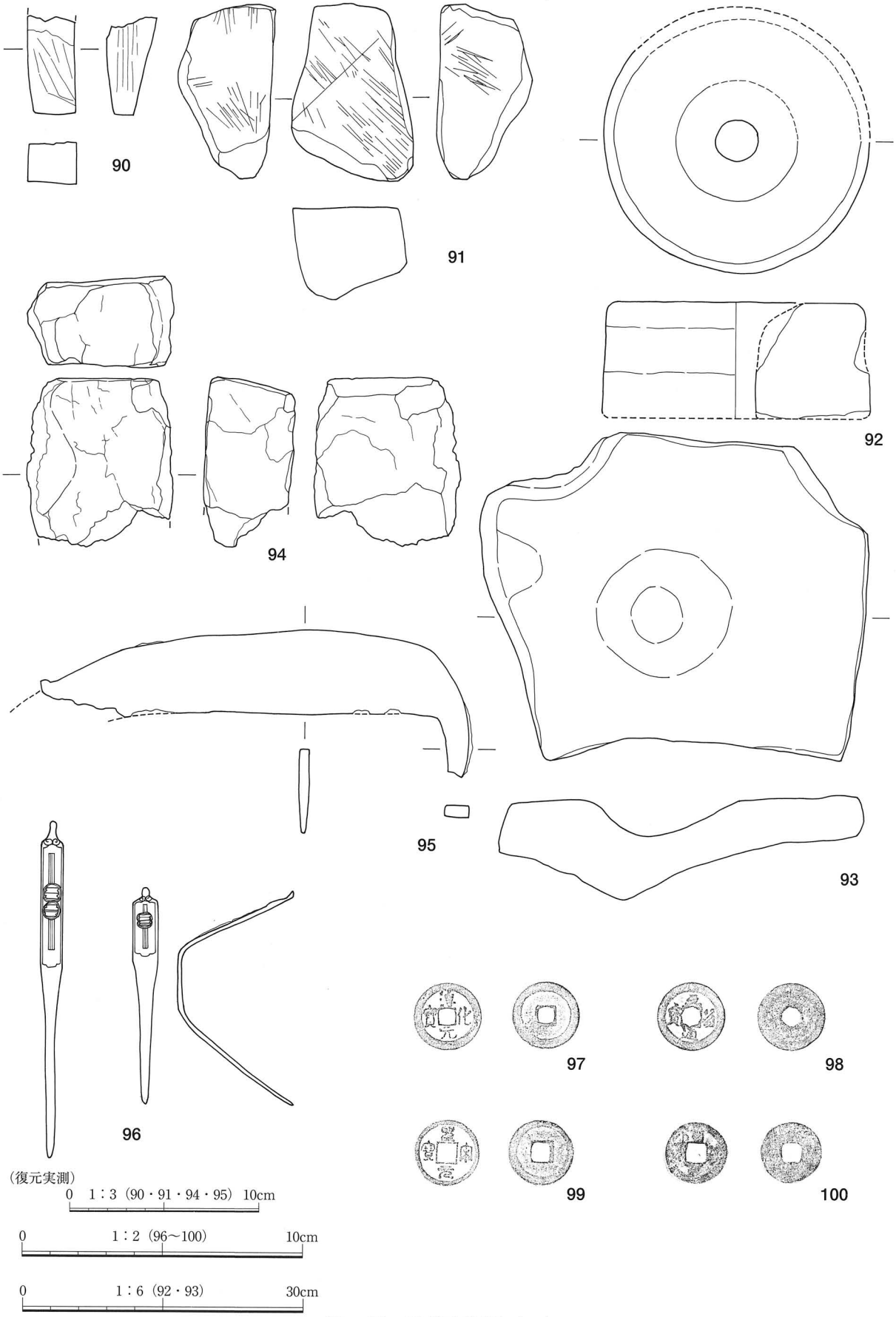
第19図　遺物実測図（6）


68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
1：3
10cm
0
1：2（70・76・84）
10cm

第20図　遺物実測図（７）



第21図　遺物実測図（８）


90
91
92
94
95
93
96
97
98
99
100
（復元実測）
0　1：3（90・91・94・95）10cm
0　1：2（96～100）10cm
0　1：6（92・93）30cm

第22図　遺物実測図（９）

焼成良好で、鉱物粒をほとんど含んでいない。

金属製品（95～100）　金属製品には鉄製品の鎌（95）と銅製品の笄（96）、銅銭（97～100）がある。銅銭は97～99が北宋銭で、97が「淳化元寶」で990年初鋳、98が「元符通寶」で1098年初鋳、99は「聖宋元寶」で1101年初鋳である。100は「元□通寶」と判読される。

4．小結

調査地区は願海寺城跡の北東部域にあたる場所で、戦国時代～安土桃山時代と考えられる溝や土坑、小ピットが検出されている。溝は、調査区北西部において南東を隅とする「L」字状の溝、調査区中央部では北東を隅にするような「L」字状あるいは「コ」の字状に巡る溝が検出された。調査区中央部にあるSD01・11・12・15が重複する箇所では、SD15を俵を使用して埋め戻し、SD01～11を掘削して、さらにSD01と11の間を部分的に埋めて土橋としていた。SD12ではSD11よりも新しい時期に溝底面の再掘削が認められ、越中瀬戸等の陶器が廃棄されていた。これらの溝の内側部分には、小ピットや杭が見られたが、残念ながら調査範囲内では、建物跡としては組めなかった。

出土遺物は、土師器の皿、漆椀、越中瀬戸等が出土している。土師器の皿については、すべて宮田氏（宮田 1997）のⅥ期（16世紀前半～16世紀末）の時期のものと思われる。宮田氏はⅥ期をさらに分けており、16世紀前半～中頃のものを「口縁端部をつまみ上げて丸くなり、少し肥大する」、16世紀中頃から後半のものを「口縁端部を内につまみ上げるもの以外に、端部が尖るものがある」、16世紀末には「口縁部が外反し、端部が尖る。見込みに圏線をもたないものがほとんどである」としている。SD01から出土した2点は、端部内面がわずかに凹んでいるタイプで、どちらかというと端部が尖った印象のものである。SD18出土の2点は、SD01と同様の体部形態であるが、端部がつまみ上げられている。願海寺城跡の平成14年調査出土品と較べても、端部の肥厚が弱く、つまみ上げも弱いことに違いが見られ、これらとの比較から16世紀中頃から後半のものと思われる。

漆椀は久々忠義氏（久々 1986）の第Ⅱb期（16世紀中葉）と第Ⅱc期（16世紀後葉）を主体としたものが出土している。SD01からは第Ⅱb・Ⅱc期のものが出土し、SD18からは第Ⅱb期のものが、SD12・19からは、第Ⅱc～Ⅲ期頃のものが出土している。絵柄としては鶴の紋様が簡略化されている点から、平成14年調査出土品と較べるとより新しい時期のものと考えられる。

越中瀬戸は、SD12、SD19、包含層から出土している。SD12や包含層から出土している擂鉢は口縁断面形態が黒川窯の製品に類似している。SD12出土の丸皿3点は、高台部の形態や印花文が小森窯・山下窯の製品に類似している。黒川窯の操業年代は、1575年頃から1600年頃まで、小森・山下窯は、1590年頃から1610年頃までに比定されている。SD12からは、唐津の皿が出土しており、盛編年のⅠ－1期（1580年～1594年頃）のものと見られる。

以上のように、出土遺物から見ると、SD01・18は16世紀後半代でも越中瀬戸以前の段階、SD12・19は16世紀末葉の段階と考えられる。

〈参考文献〉

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 No. 2　日本貿易陶磁研究会
久々忠義　1986　「富山県内出土の漆器について」『大境』第10号　富山考古学会
宮田進一　1997　「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』 北陸中世土器研究会
盛　峰雄　2000　「肥前（佐賀県）の製品について　陶器の編年1　椀・皿」『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

表2　溝一覧表

遺構番号	位　置	規　模（m）			主軸方向	出土遺物	遺物No.	時期・備考
		全長	上幅	深さ				
SD01	北地区南西部	10.60	3.20	1.03	東西	土師器皿、珠洲、漆椀、木簡、下駄、櫛、箸状木製品、塼、北宋銭	1、6，26、27、28、35、36、37、38、39、40、41、52、59、70、76、83、84、94、97、98、100	16世紀第3四半期頃
SD02	北地区南西部	2.90	1.05	0.02	南北	箸状木製品、北宋銭	82、99	
SD03	北地区南西部	1.60	1.30	0.30	東西			
SD04	北地区南西部	6.00	1.30	0.51	南北			
SD05	北地区南西部	5.20	0.62	0.43	東西			
SD06	北地区南西部	6.54	1.30	0.19	南北	漆皿	81	
SD07	北地区南部	1.20	1.10	0.05	南北			
SD08	北地区南部	4.20	1.20	0.20	東西			
SD09	北地区南東部	13.00	1.80	0.70	東西－南北	下駄、曲物、折敷	48、64、67、68	
SD10	北地区南部	3.20	5.00	0.66	南北	珠洲、越中瀬戸、下駄	18、29、54	
SD11	北地区南部	39.50	3.40	0.71	東西－南北	珠洲、下駄、曲物、陽物	32、33、57、65、85、87、95	
SD12	北地区南部	33.50	4.10	0.67	東西－南北	唐津、越中瀬戸、漆椀、曲物	11、13、14、15、19、20、21、23、24、25、43、62、90、93	16世紀末頃
SD13	－	－	－	－	－	－	－	欠番
SD14	北地区南部	1.94	0.58	0.12	－	－	－	
SD15	北地区南部	6.40	1.15	0.70	東西	下駄、笄	50、96	
SD16	北地区南部	－	－	0.14	－	－	－	
SD17	北地区北部	4.00	3.20	0.64	東西	土師器皿、青磁碗、下駄	3、7、10、49、53、55、91	
SD18	北地区北部	11.47	2.40	0.70	南北	土師器皿、漆椀、漆皿、下駄、曲物	2、4、44、47、51、58、60、61、66、77、78、80、	16世紀第3四半期頃
SD19	南地区西部	11.50	2.43	0.65	東西－南北	越中瀬戸、漆椀	12、42、45	
SD20	南地区中央部	10.62	0.83	0.34	東西			

表3　土坑一覧表

遺構番号	位　置	平面形状	規　模（m）			出土遺物	遺物No.	時期・備考
			長径	短径	深さ			
SK01	X40, Y30	円　形	0.61	0.54	0.45	土師器皿、折敷	5、69	
SK02	X30, Y10	長方形	1.58	0.67	0.24	—	—	
SK03	X30, Y10	長方形	1.53	0.52	0.10	—	—	
SK04	X30, Y20	楕円形	1.19	0.75	0.22	—	—	
SK05	X40, Y30	円　形	0.56	0.53	0.41	曲物、板	63、71、72、73、74、75	
SK06	X30, Y10	楕円形	0.71	0.58	0.54	—	—	
SK07	X30, Y10	楕円形	0.90	0.64	0.18	—	—	
SK08	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK09	X70, Y10	円　形	0.94	0.85	0.57	青磁碗	9	
SK10	X60, Y10	円　形	0.59	0.55	0.20	—	—	
SK11	X40, Y10	楕円形	0.43	0.41	0.05	—	—	
SK12	X40, Y10	楕円形	0.51	0.37	0.13	—	—	
SK13A	X40, Y10	楕円形	2.54	1.48	0.73	—	—	
SK13B	X40, Y10	楕円形	3.11	2.40	0.72			
SK14	X10, Y30	—	0.44	—	0.11	—	—	
SK15	X10, Y30	楕円形	0.74	0.57	0.24	—	—	
SK16	X10, Y30		1.18	—	0.18	—	—	
SK17	X10, Y30	不整形	1.50	1.09	0.12	—	—	木根穴か
SK18	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK19	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK20	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK21	X0, Y40	—	—	—	—	珠洲	—	
SK22	X70, Y10	円　形	—	0.63	0.68	—	—	

表4　小ピット一覧表

遺構番号	位　置	規　模（m）			出土遺物	遺物No.	時期・備考
		長径	短径	深さ			
P01	X40, Y10	0.40	0.37	0.22	珠洲甕	34	—
P02	X40, Y10	0.43	0.30	0.23	—	—	—
P03	X40, Y10	0.33	0.31	0.22	—	—	—
P04	—	—	—	—	—	—	欠番
P05	—	—	—	—	—	—	欠番
P06	—	—	—	—	—	—	欠番
P07	X40, Y10	0.19	0.17	0.24	—	—	—
P08	X40, Y10	0.24	0.19	0.13	—	—	—
P09	X30, Y10	0.24	0.22	0.16	—	—	—
P10	X40, Y10	0.27	0.21	0.15	—	—	—
P11	X30, Y10	0.17	0.17	0.12	—	—	—
P12	X30, Y10	0.20	0.19	0.15	—	—	—
P13	X30, Y10	0.19	0.17	0.16	—	—	—
P14	X30, Y10	0.22	—	—	—	—	—
P15	X30, Y10	—	—	0.43	—	—	—
P16	—	—	—	—	—	—	欠番
P17	X30, Y20	0.25	0.21	0.24	—	—	—
P18	X30, Y20	0.32	0.24	0.09	—	—	—
P19	X30, Y10	0.26	0.22	0.25	—	—	—
P20	X40, Y20	0.09	0.08	0.12	—	—	木杭
P21	X30, Y20	0.07	0.07	0.14	—	—	木杭
P22	X40, Y20	0.06	0.04	0.08	—	—	木杭
P23	—	—	—	—	—	—	欠番
P24	X30, Y10	0.17	0.15	0.09	—	—	—

表5　出土遺物一覧表

No.	出土位置	種別	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	遺　存	備　考
1	SD01	土師器	皿	13.8	2.3	—	4/5	
2	SD18	土師器	小皿	11.6	2.5	—	2/3	
3	SD17	土師器	小皿	9.3	2.2	—	2/3	
4	SD18	土師器	小皿	9.4	2.4	—	3/4	
5	SK01	土師器	小皿	(8.4)	2.1	—	口縁部片	
6	SD01	土師器	皿	9.4	2.2	—	4/5	
7	SD17	土師器	小皿	8.4	2.1	—	2/3	
8	包含層	青磁	碗	—	(2.9)	5.3	底部片	
9	SK09	青磁	碗	(15.6)	—	—	口縁部片	
10	SD17	青磁	碗	(12.4)	—	—	口縁部片	
11	SD12	唐津	丸皿	—	—	4.7	口縁部欠損	
12	SD19	越中瀬戸	丸皿	(10.6)	2.5	5.6	1/3	
13	SD12	越中瀬戸	丸皿	(10.1)	2.5	4.8	1/2	
14	SD12	越中瀬戸	丸皿	(10.2)	2.7	4.8	1/2	
15	SD12	越中瀬戸	丸皿	10.3	2.5	3.8	完形	
16	包含層	越中瀬戸	丸皿	(10.4)	2.3	3.8	2/3	
17	包含層	越中瀬戸	丸皿	—	(1.9)	4.5	底部片	
18	SD10	越中瀬戸	瓶	(4.8)	—	—	口縁部片	
19	SD12	越中瀬戸	丸碗	(10.2)	—	—	口縁部片	
20	SD12	越中瀬戸	丸碗	—	—	4.7	底部片	
21	SD12	越中瀬戸	擂鉢	(34.0)	—	—	口縁部片	
22	包含層	越中瀬戸	擂鉢	(23.8)	(2.7)	—	口縁部片	
23	SD12	越前	壷	—	—	—	口縁部片	
24	SD12	越中瀬戸	擂鉢	—	(4.2)	(11.5)	底部片	
25	SD12	越中瀬戸	擂鉢	—	—	(11.0)	底部片	
26	SD01	珠洲	壷口縁	(9.8)	(6.9)	—	口縁～胴部片	
27	SD01	珠洲	壷	—	(4.0)	(8.6)	底部片	
28	SD01	珠洲	甕	—	—	—	口縁部片	
29	SD10	珠洲	甕	—	—	—	口縁部片	
30	南地区包含層	珠洲	甕			—	胴部片	
31	南地区包含層	珠洲	甕			—	胴部片	
32	SD11	珠洲	擂鉢	(11.6)	(4.9)	—	底部片	
33	SD11	珠洲	擂鉢	—	(5.6)	(13.5)	底部片	
34	P01	珠洲	甕	—	—	—	底部片	

No	出土位置	種別	器　種	計　測　値（cm）	備　　考
35	SD01	木製品	漆椀	口径12.1、器高7.2、底径6.3	ブナ科ブナ属
36	SD01	木製品	漆椀	口径13.4	ブナ科ブナ属
37	SD01	木製品	漆椀	口径（11.5）	トチノキ科トチノキ属トチノキ
38	SD01	木製品	漆椀	—	ブナ科ブナ属
39	SD01	木製品	漆椀	—	ブナ科ブナ属
40	SD01	木製品	漆椀	底径8.0	ブナ科ブナ属
41	SD01	木製品	漆椀	—	ブナ科ブナ属
42	SD19	木製品	漆椀	—	
43	SD12	木製品	漆椀	口径14.9、器高9.9、底径7.8	ブナ科ブナ属
44	SD18	木製品	漆椀	口径12.2、器高5.6、底径6.5	ブナ科ブナ属
45	SD19	木製品	漆椀	口径（12.3）	ブナ科ブナ属
46	SD06	木製品	漆皿	口径9.7、器高2.5、底径5.8	トチノキ科トチノキ属トチノキ
47	SD18	木製品	漆皿	口径(9.8)、器高2.3、底径(7.1)	ブナ科ブナ属
48	SD09	木製品	下駄	現存長（21.7）、幅10.2、厚3.9	モクレン科モクレン属
49	SD17	木製品	下駄	現存長（12.4）、幅8.0、厚1.9	クルミ科クルミ属サワグルミ
50	SD15	木製品	下駄	現存長(14.0)、幅9.5、厚さ3.0	モクレン科モクレン属
51	SD18	木製品	下駄	現存長（9.1）、幅9.0、厚さ1.8	モクレン科モクレン属
52	SD01	木製品	下駄	長16.2、幅8.6、厚さ1.0	ブナ科ブナ属
53	SD17	木製品	下駄歯	高10.5、幅14.4、厚1.8	ブナ科クリ属クリ
54	SD10	木製品	下駄歯	高12.1、厚7.3	モクレン科モクレン属
55	SD17	木製品	下駄歯	高11.6、厚1.8	
57	SD11	木製品	下駄歯	高9.7、厚1.6	
58	SD18	木製品	下駄歯	高10.4、厚1.9	
59	SD01	木製品	下駄歯	高10.5、厚1.4	
60	SD18	木製品	曲物	径17.5、高7.3、底板厚0.6	
61	SD18	木製品	曲物	径7.6、高6.8、底板厚0.6	ヒノキ科アスナロ属
62	SD12	木製品	曲物底板	径7.2、厚0.5	ヒノキ科アスナロ属
63	SK05	木製品	曲物底板	推定径（25.6）、厚0.5	
64	SD09	木製品	曲物底板	径24.0、厚0.5	ヒノキ科アスナロ属
65	SD11	木製品	曲物底板	推定径（23.6）、厚065	

No	出土位置	種別	器　種	計　測　値（cm）	備　　考
66	SD18	木製品	曲物底板	径20.2、厚さ0.6	
67	SD09	木製品	曲物側板	長34.6、幅7.8、厚さ0.2	
68	SD09	木製品	折敷	長29.8、現存幅(10.2)、厚さ0.24	ヒノキ科アスナロ属
69	SK01	木製品	折敷	現存長(16.6)、幅6.9、厚さ0.2	
70	SD01	木製品	木簡	現存長(12.5)、幅2.1、厚さ0.1	スギ科スギ属スギ
71	SK05	木製品	板		
72	SK05	木製品	板	長18.7、幅3.0、厚さ0.2	
73	SK05	木製品	板	長14.6、幅2.9、厚さ0.2	
74	SK05	木製品	板	長16.5、幅3.2、厚さ0.25	
75	SK05	木製品	板	長17.9、幅2.8、厚さ0.1	
76	SD01	木製品	櫛	現存幅（6.4）、高4.5、厚0.9	ツツジ科ネジキ属ネジキ
77	SD18	木製品	不明	現存長（12.0）、幅5.1、厚1.1	
78	SD18	木製品	不明	長6.4、幅4.8、厚さ1.0	
79	SD13	木製品	加工材	現存長（10.8）、幅2.8、厚1.4	
80	SD18	木製品	楔状木製品	長14.1、幅3.6、厚2.3	
81	SD06	木製品	棒状	長24.7、幅1.2、厚さ0.4	
82	SD02	木製品	箸状木製品	長12.7、幅0.6、厚0.6	ヒノキ科アスナロ属
83	SD01	木製品	箸状木製品	現存長（7.9）、幅0.7、厚0.6	
84	SD01	木製品	円盤状	径2.9、厚0.7	ヒノキ科アスナロ属
85	SD11	木製品	陽物	長17.3、幅4.2、厚さ5.4	ブナ科クリ属クリ
86	SD01	木製品	板材	長84.2、幅19.4、厚さ1.4	
87	SD11	木製品	加工材	現存長（57）、幅5.0、厚2.0	
88	P22	木製品	木杭		
89	P20	木製品	木杭		
90	SD12	石製品	砥石	長5.1、幅3.0、厚さ2.2、重48.26kg	凝灰岩
91	SD17	石製品	砥石	長10.0、幅6.4、厚さ5.0、重388.4kg	凝灰岩
92	SD01	石製品	石臼	径29.0、厚12.5、内径4.5、重9.42kg	砂岩
93	SD12	石製品	礎石	長42.0、幅33.0、厚10.5、重15.05kg	砂岩
94	SD01	土製品	塼	現存長（9.0）、幅7.6、厚4.7	
95	SD11	鉄製品	鎌	現存長(24.5)、幅4.5、厚0.5、重196g	
96	SD15	金属製品	笄	長17.9、幅1.1、厚さ0.2、重18.92g	
97	SD01	銅製品	銭	径2.45、厚0.12、孔径0.66、重3.16g	「淳化元寶」
98	SD01	銅製品	銭	径2.5、厚0.10、孔径0.65、重2.08g	「元符通寶」
99	SD02	銅製品	銭	径2.44、厚0.11、孔径0.70、重2.24g	「聖宋元寶」
100	SD01	銅製品	銭	径2.35、厚0.06、孔径0.66、重1.88g	「元□通寶」

付編　願海寺城下町の推定

古川　知明

1　問題の所在

願海寺城は、寺崎民部左衛門尉盛永とその子喜六が城主として居城した戦国時代の平城である。城跡は、呉羽山丘陵西方の射水平野中央に位置する富山市願海寺集落に所在する。呉羽山を横断して東西に延びる北陸道は、この願海寺集落に至って細かく屈曲し、「願海寺の七曲り」として知られる。明治44年地形図にはその様子がよく表れている。

寺崎氏が居城した願海寺城の位置については、これまでの研究によりおおよその位置が推定されていたが、近年の発掘調査の結果ほぼその位置が明らかになり、また周辺の試掘確認調査の成果から、願海寺城下町に関するデータが得られつつある。

このような中で、今回の発掘調査によって戦国期の遺構が確認されたことは、願海寺城下町の範囲と構造の解明に大きく寄与するものである。本稿では、過去の調査結果等を踏まえた願海寺城下町の復元を試み、今回の遺構の位置付けについて検討する。

2　願海寺城と寺崎氏

願海寺城主寺崎民部左衛門は、能登畠山臣下寺崎平左衛門行重の子とされる。その出自は不明だが、建徳３（1371）年桃井直常は寺崎備中守に高岡守山城を守らせており、寺崎氏は桃井氏の臣下であったとみられる。

その後寺崎氏が記録に登場するのは、天文11（1542）年から天正９（1581）年までである。天正11年から元亀元（1570）年頃までは神保方の武将として上杉方と対抗していたが、元亀３年には一向一揆勢に対抗して上杉方についた。天正６年謙信死去に伴い一時織田方につくが、佐々成政の越中分封に反抗して上杉方につき、天正９年織田方に攻められ落城する。

天正９年田中尚賢等連署状〔富山県 1980〕によれば、城は少なくとも「実城」と「二之廻輪」の２郭以上をもつ構造であったことがわかる。

3　これまでの調査・研究

先述の「願海寺の七曲り」は、戦国時代において軍勢の進攻を困難にする目的で構築されたという考えは、すでに明治時代の『越中遊覧志』で指摘されたところだが、ここでは佐々成政が築造したと考えられていた。実際は寺崎氏が整備した願海寺城とその城下町に関連した構築物であると認識されるものであるが、これを願海寺城とほぼ同時期に存在した石黒氏の木舟城とその城下町の分析から明らかにしたのが高岡徹氏である。高岡氏は、木舟城北側に東西に延びる北陸道（中田道）が、城下町西口付近で細かい屈折を繰り返し「小曲り」と呼ばれており、また城北側の城下町で大きく屈折する「大曲り」の存在に注目し、これらが敵が一気に急進撃して攻め込まないようにするための防御とした。「願海寺の七曲り」はこの木舟城の大曲り・小曲りと共通する性格のものであると指摘した〔高岡 2002〕。

また高岡氏は、地名・通称を手がかりに願海寺城下町の範囲を復元する研究を行った〔高岡 1975、1980、1997、2002〕。それによると、城があったと推定されるのは願海寺字舘本地内で、「舘」は居館を示す。その周囲には、町屋を示す「ナカマチ」「アラマチ」「コオリマチ」、家臣団を示す「蔵地」「ダイガク」「チゴデラ」、城の正面を示す「オモテ」、城を取り巻く湿地帯を示す「深田」「ドブケ」等が存在し、この範囲に城下町が復元されることを想定している。またこの構造は木舟城下町との類似性もみられるという。

石川旭丸氏は、記録や伝承から願海寺城史を検討した〔石川 1975・1976〕。それによると、寺崎氏が願海寺（射水郡開発村）へ移住した時期は天文６～８（1537～1539）年頃と推定され、その後約30年後、願海坊巧空が寺崎氏の居館の南に隣接して堀と城壁を巡らした願海寺を建立したが、寺崎氏はこれを焼き討ちし、その跡に城を築城したとされる。

これらの内容の根拠は明確でないが、天文６～８年から天正９年の落城まで約40年余り寺崎氏の城下が存続した可能性を示す。

また、石川氏の論考では、城の東南隅の石垣が明治まで存在していたこと、昭和６年に舘本地内で地下から砂と砂利を敷き詰めた２間×３間の鍵形の基礎跡や五輪塔が検出されたことなど興味深い記録が報告されている。

一方、平成14（2002）年度に富山市教育委員会が行った発掘調査では、願海寺字舘本地内において戦国時代の居住区・堀等の遺構と遺物が多数出土した。確認された堀は二重に巡る防御性の工夫がなされた構造で、土橋が検出されており、堀の北側に郭が存在することが明らかになっている。出土遺物には、表面に人名とみられる「多て王き」（たてわき）、裏面に攻めるの意味をもつ「王り多て」の文字が書かれた木簡、将棋駒「歩兵」、土蔵建物の壁とみられる塼（焼レンガ）、刃物痕のある木柄等があり、これらは火災に伴って堀に廃棄されたものである〔富山市教委 2003〕。かわらけの年代から火災は16世紀第３四半期前後とみられ、天正９年頃の落城記録と一致するといえる。

江戸時代の絵図のいくつかには古城跡の位置が示されているものがある。石黒信由作成「射水郡大絵図」（文化７年下書、文政10年改書）には願海寺の七曲りが南へ大きく屈曲した部分、願海寺集落の南側に城跡が示されており、発掘調査で確認された郭・堀の位置とほぼ符合しているようである。

4　願海寺城下町の復元（第23図）

これまでの研究では地名等により城下町の概略範囲が検討されたが、具体的な範囲はまだ十分に明示されていない。ここでは、明治44年発行の地形図をもとに、発掘成果及び街道の方向・地割・段差等の微地形を観察し、願海寺城と城下町の復元を試みたい。

地形図では、鉄道の敷設のため北陸道が一部変形したところを除き、旧地形を良好に遺しており、地割・微地形がよくわかる。

前述のように、北陸街道は願海寺集落東方で「七曲り」と呼ばれる幾度かの屈曲を示す。この屈曲部分を除くおおよその北陸街道の主軸方向は、南北方向に換算してN-10°～20°-Eを示す。七曲り区域に入ると、その東半部では、細かく鈍角に屈曲するのに対し、現願海寺集落付近の西半部では、ほぼ直角方向に大きく屈曲することが特色として挙げられる。この意味で七曲りの屈曲は、北陸道の方向をおよそ意識していることがわかる。

地形図をみると、この北陸道や七曲りの方向と同じまたはこれと直交する（N-15°～25°-E）地割が多く認められる。東側は、七曲りが始まる野口集落南方から野口集落内を結ぶラインである。西側はほぼ鍛冶川支流砂川のラインである。北側は野口集落と願海寺集落を結ぶラインであるが、願海寺集落東部から北方へ延びる道路地割が存在し、このラインより一部北側への広がりも予想される。南側は舘集落の南側のラインである。ここには東西方向に崖状の落込みが存在し、城あるいは城下の南限を示す堀跡の痕跡の可能性がある。このラインを囲んだ範囲、東西約１km、南北約600mが城下町エリアと推定される。

このように考えた場合、願海寺城は願海寺集落の南、城下町東西中央主軸線上に存在し、その背後に賀茂社が位置する。賀茂社の西側は鍛冶川支流砂川が控え、城の後背地を構成する。

また願海寺集落と野村集落の中間北部には、神社が鎮座する。昭和初期の道路築造の際別社に合祀

されたとみられ、神明社であった可能性が高いが現存しない（舟竹孝氏による関係者への聞取による）。この神社は城下町北限ラインのほぼ中央に所在し、願海寺城の北東方向にあって鬼門の位置を示すことから、願海寺城にとって重要な意味をもつ神社と考えられるが詳細は不明である。

このように推定した城下町エリア内においては、今回調査も含めこれまで７件の試掘確認調査が行なわれており、うち５箇所において戦国期遺構・遺物が確認されている。また高岡氏が調査した地名・名称はほぼこの範囲に含まれている。

5　今回検出遺構の性格について

今回調査で検出された溝 SD01・11・19によって囲まれるコの字形の区画は、南北約32m 強（18間、東西は約20m を確認）の方形区画であり、その主軸はおよそ N-10°-W となる。この方向は、先に推定した願海寺城下町全体の主軸方向と20° 異なる。全体としては居館的様相を示すが、これと同一軸である SD04・06が区画溝とすれば、地口９間半もしくは７間、奥行17間の短冊形敷地を形成することになり、屋敷地とも考えられる。

一方Ｌ字形の溝 SD09はほぼ南北方向を主軸とし、これと同じ方向を持つ溝には SD17・18がある。これらは SD01・11・19よりもやや規模が小さいことでも共通する。前者と後者はそれぞれ別区画の屋敷地とみられ、両者の間は10.8m（６間）離れており、道路跡の可能性がある。

以上のことから、今回調査区には①N-10°-W 方向の区画と、②ほぼ正方位の区画の２種類の区画が存在するといえる。この区画の年代は、区画溝内から出土した遺物の年代から、①が16世紀第３－４四半期、②が16世紀第２－３四半期の構築とみられ、②→①への変遷を認めることができそうである。

この２種の区画について、寺崎氏が記録上に現れる年代と比較すると、正方位をとる②の区画がほぼそれに当たるとみられる。

一方、今回調査区の南方にある字舘本地内では、これとほぼ同時期に築造したとみられる城館とその周囲の調査が行なわれており、平成14年度の木簡等が出土した堀跡等の主軸は、N-30°～50°-E を示し、これまで見てきた推定城下町や街道の方向、遺構の方向と大きく異なっている。また、そのすぐ東側の試掘でも N-40°～50°-E の区画と、ほぼ正方位の区画の２種が検出されている。

このような状況をどう理解するかについては諸説がでようが、構造が解明されている木舟城と比較して考えた場合、木舟城では全体としては方形基調であるが、細部をみると、カーブしたり主軸とは10-20° のズレをもったラインが存在していることからみて、必ずしも真四角な郭を復元する必要はないようである。実際発掘調査で検出された内堀も緩くカーブを描いており、この推定を裏付けている。また別の視点として自然地形（河川や沼等）が存在するため屋敷地の配置に制約を受けることもあるだろう。

6　おわりに

願海寺城及びその城下町については、近年の発掘調査によって次第にその姿が明らかになりつつある。しかし発掘調査はいずれも小規模なもので、全容の解明には今しばらくの時間がかかりそうである。本稿は今回の調査に際し、これまでの細かな調査の成果をまとめて城下町全体の姿を解明しようと努めたものである。試掘確認調査では、今回推定した城下町内に存在するものの、局所的には沼地で居住痕跡が確認できなかった地点も含まれており、城下周辺がかなり湿地的環境で住みにくかったことも明らかになっている。このような自然的環境という視点も含めて今後更なる解明を試みる必要があろう。

最後に、本稿を作成するにあたり、舟竹孝氏、三枝教次氏、若宮得幸氏、新湊市博物館には多大な

るご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

参考文献

石川旭丸　1975　「願海寺城攷　上」『富山史壇　61号』越中史壇会

石川旭丸　1976　「願海寺城攷　下」『富山史壇　62・63合併号』越中史壇会

奥田淳爾　1973　「天正中期越中国人の動向」『富山史壇　56・57合併号』越中史壇会

塩　照夫　1972　『富山県の歴史　越中の古城』北国出版社

高岡　徹　1975　「国人寺崎氏の本拠地―願海寺―」『富山史壇』第61号　越中史壇会

高岡　徹　1980　「願海寺城」『日本城郭大系７　新潟・富山・石川』新人物往来社

高岡　徹　1988　『越中戦国紀行』北日本新聞社出版局

高岡　徹　1997　「戦国末期の国人城下町・木舟」『砺波散村地域研究所研究紀要』第14号　砺波市立散村地域研究所

高岡　徹　2002　「戦国末期における木舟城と城下町の復元研究―国人石黒氏の盛衰と城下町の様相―」『富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告書―範囲確認調査報告―』福岡町教育委員会

竹中邦香著・廣瀬誠校訂　1983　『越中遊覧志』言叢社

富山県　1980　『富山県史　史料編Ⅲ近世上』

富山市教育委員会　2003　『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ―水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡―』

古川知明　2004　「願海寺城と太田本郷城」『平成16年度富山市民大学講座市民の考古学―佐々成政と中世城館―資料』

第23図　願海寺城下町復元図（ベース図は明治44年発行迅速図）

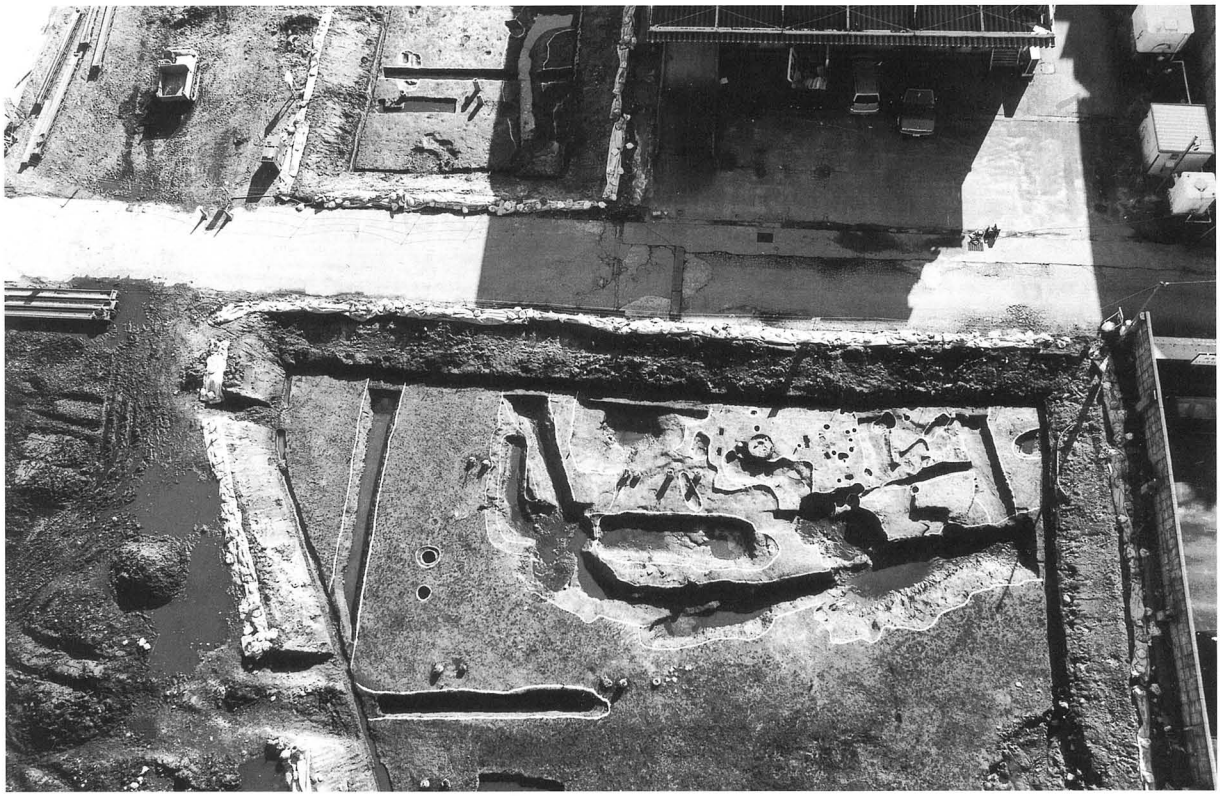
願海寺城関係史

年　号	歴　史　事　項	備　考
	※能登畠山臣下寺崎平左衛門行重の子民部左衛門盛永	
天文６－８頃	寺崎氏射水郡開発村に移住	
天文11（1542）	盛永、放生津城を救援	神保方
天文19（1550）	寺崎泰山入道・金森斎宮が願海寺野で上杉方と戦う	神保方
天文21（1552）	盛永、井田城主飯田利忠と天神林で戦う	神保方
元亀元（1570）	盛永、神保氏春らの将として、石黒左近らとともに魚津城の上杉方を攻める	神保方
元亀３（1572）	盛永、一揆勢との戦いでの敗戦を鰺坂長実へ伝える	上杉方
天正２（1574）	盛永、能登二宮まで侵攻（畠山氏内紛に乗じて）	上杉方
天正３頃	14代了性、願海寺を小出から開発村に移転し建立	
天正４（1576）	謙信、高岡関野で遊佐信濃守、小島、鞍智、寺崎氏と戦い、これを破って能登へ向う	
天正５（1577）	上杉方将士名簿に「**寺崎民部左衛門**尉」の名が記載 盛永弟掃部政国（上杉方足軽大将）が能登黒島で討死	上杉方
天正６（1578）	３月　上杉謙信死去	
	11月　寺崎入道へ守山城に退去した能登長連龍の援助を信長が朱印状で指示	織田方
天正７頃	盛永、願海寺を焼討	
天正９（1581）	２月　佐々成政越中分封	上杉方
	５月　城下が炎上、「二之廻輪」へ小野大学助・大貝采女が織田方菅屋長頼（七尾城代）を引入れ、「実城」攻撃 盛永子喜六郎小野大学助を斬り、負傷	
	願海寺城落城	
	盛永、能登菅屋長頼の元で切腹	
	喜六郎、能登へ召寄される	
天正10（1582）	６月　盛永・喜六郎と盛永の姉の子石崎平馬、近江佐和山の丹羽長秀宅で問責	
	７月　信長の命令で佐和山にて盛永・喜六郎切腹 切腹の様子は「武勇無比　観者感嘆」 家老草野大学など５人の家臣が切腹。家老蔵地孫之進は病死	

※出典文献等は割愛した　　（古川知明作成）

願海寺城跡付近の空中写真（1946年米軍撮影）

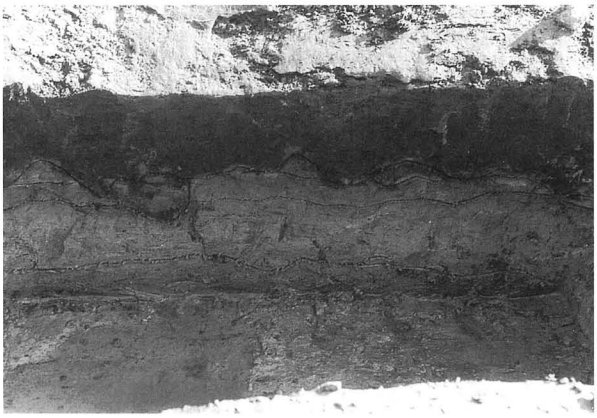
図版1



空撮全景（北から）

空撮遠景（南東から）

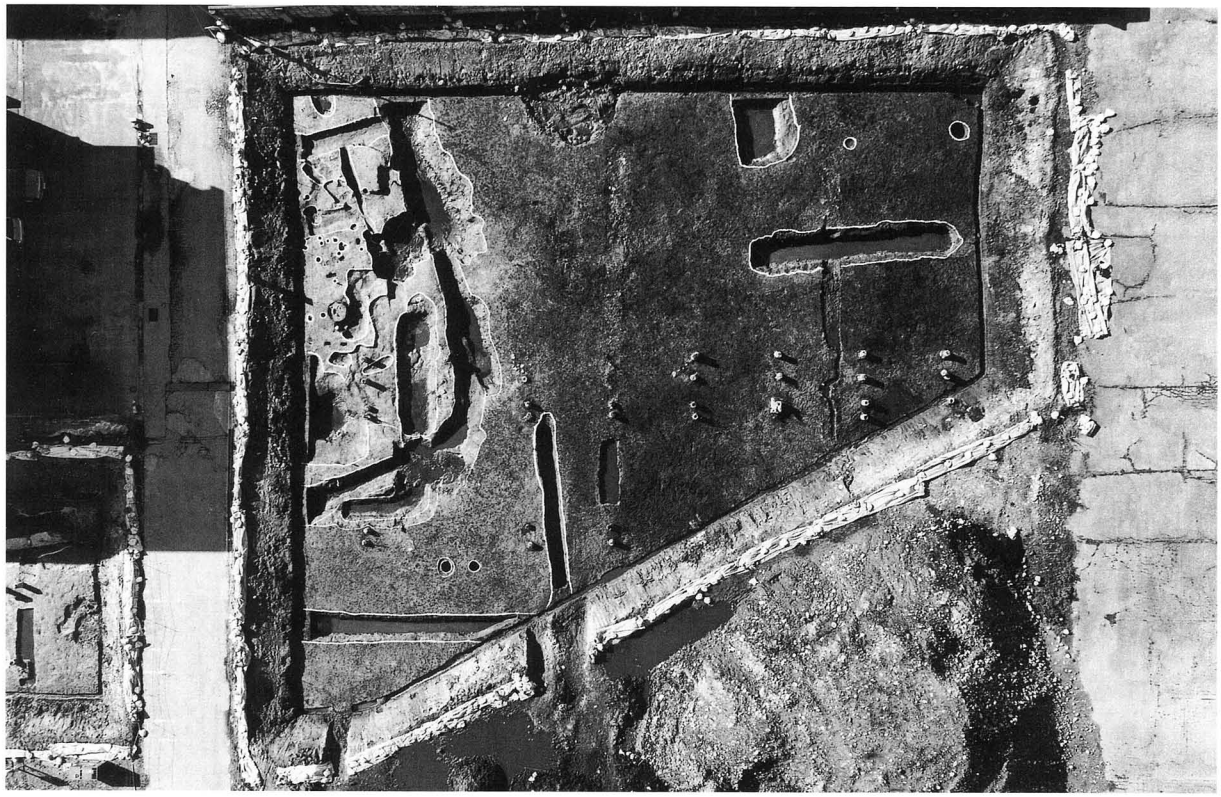
空撮遠景（北西から）



基本土層（北区 No. 1）

基本土層（北区 No. 2）

図版2



北地区空撮全景（写真の上が西）

南地区空撮全景（写真の上が西）

SD01（西から）

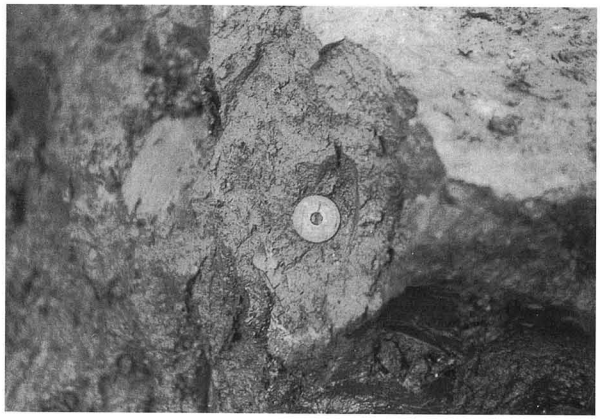
SD01東側土橋（北から）

土橋部分完掘状況

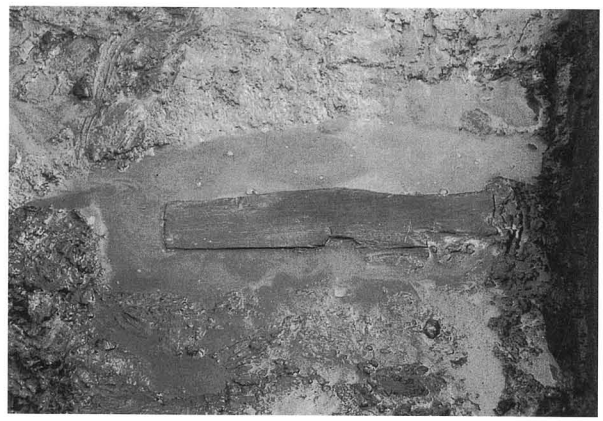
SD01漆椀出土状況

SD01漆椀出土状況

図版4

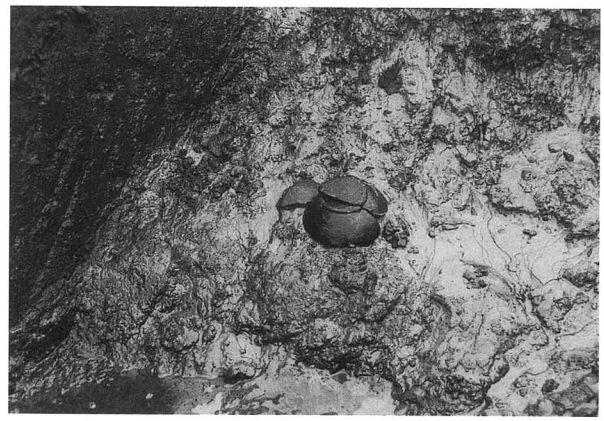


SD01銅銭出土状況



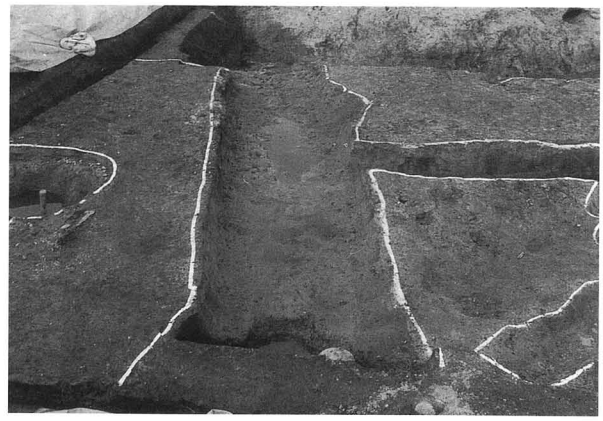
SD01木製品出土状況

SD01遺物出土状況



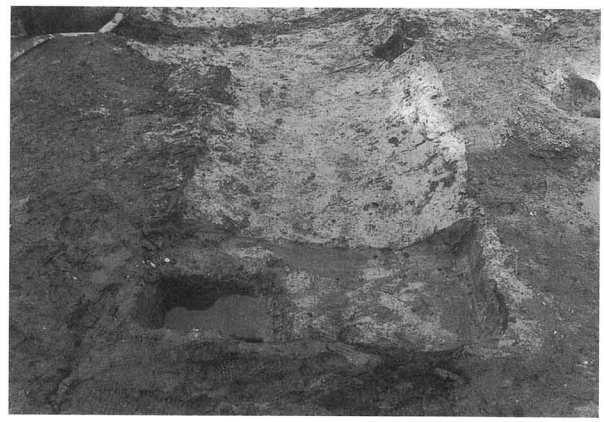
SD01漆椀出土状況

SD03完掘状況



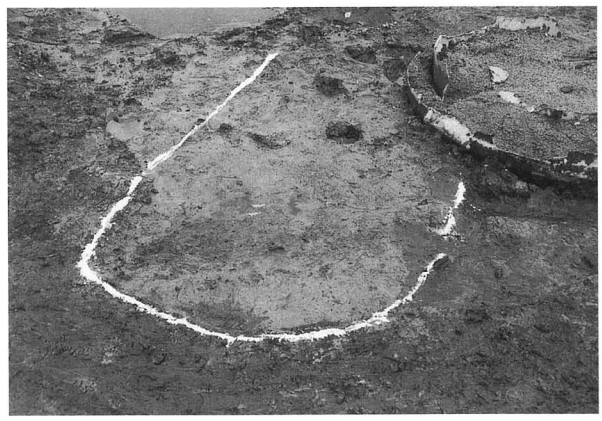
SD04完掘状況（南から）

SD04・05完掘状況（西から）

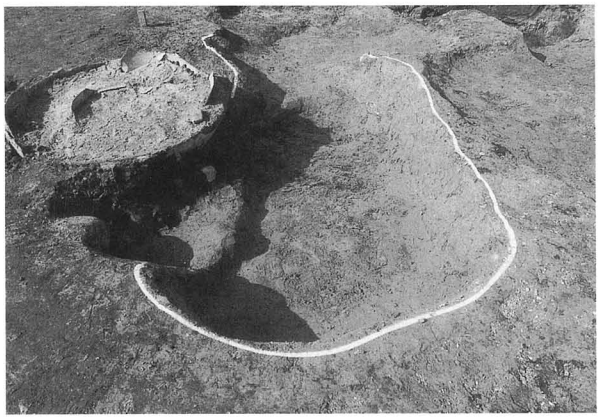


SD06完掘状況（南から）

SD04・05・06



SD07完掘状況（南から）



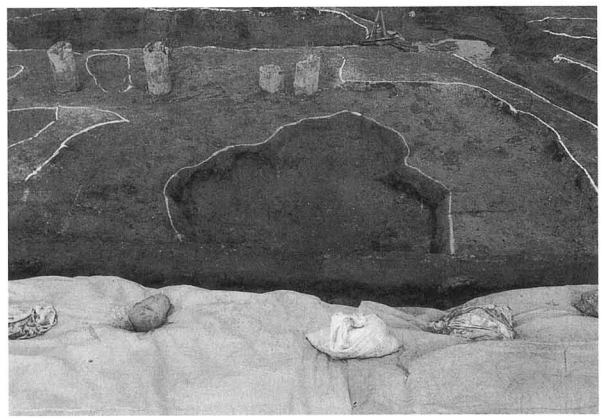
SD08完掘状況

SD09完掘状況（東から）

SD09完掘状況（北から）

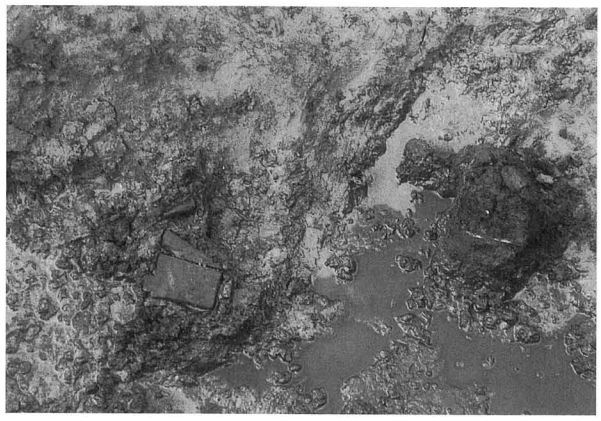
SD09土層堆積状況

SD09曲物底板出土状況



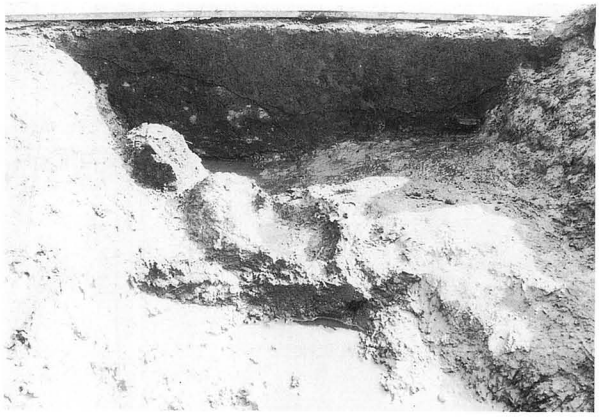
SD10完掘状況（南から）

図版6



SD10遺物出土状況

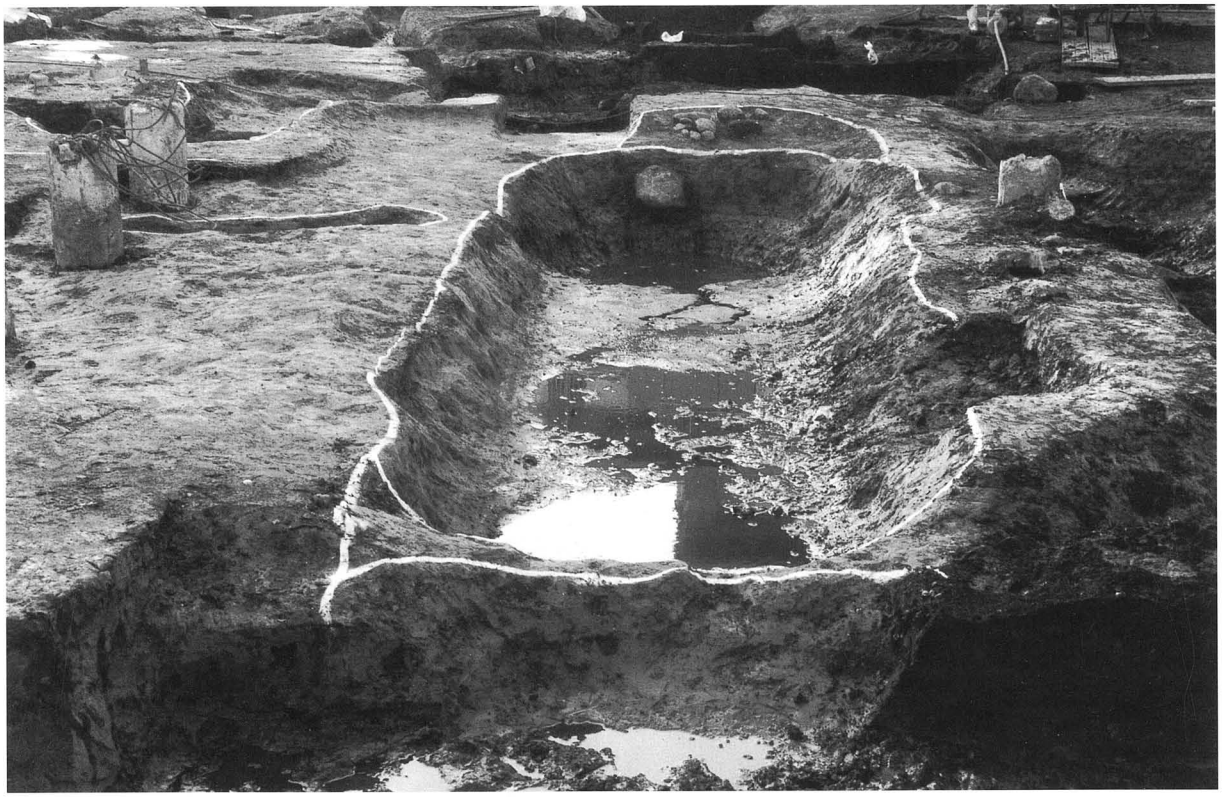
SD11完掘状況（南から）



SD11漆椀出土状況

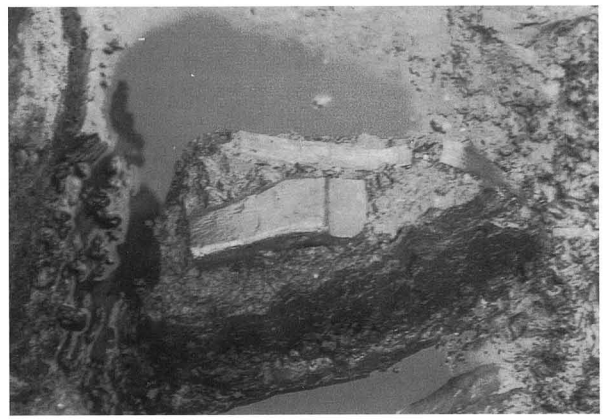
SD11木製品出土状況

SD11・12完掘状況（東から）



SD12完掘状況（東から）

SD12遺物出土状況



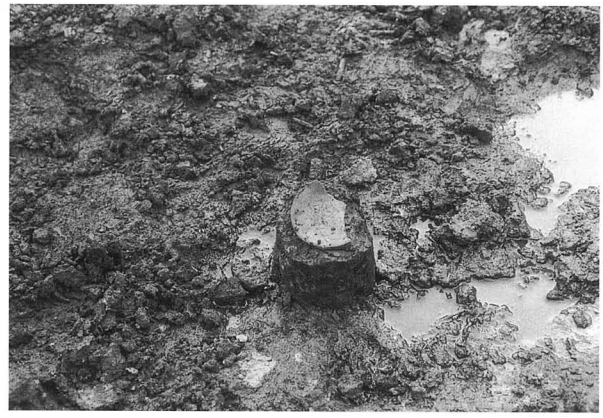
SD13木製品出土状況

SD15完掘状況

SD15遺物出土状況

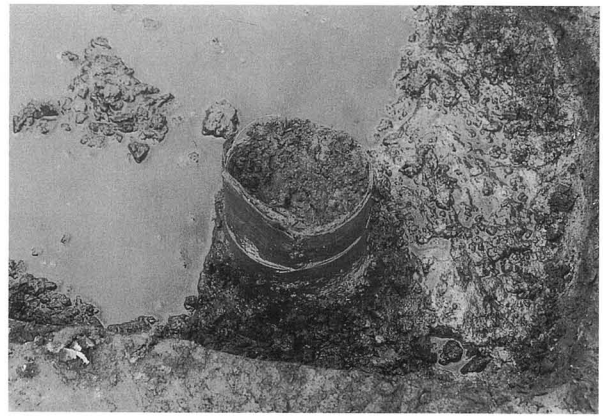
図版8

SD17完掘状況（西から）



SD17遺物出土状況

SD18完掘状況（北から）



SD18曲物出土状況

SD17・18、SK09・10完掘状況（北から）

南地区完掘状況（南から）

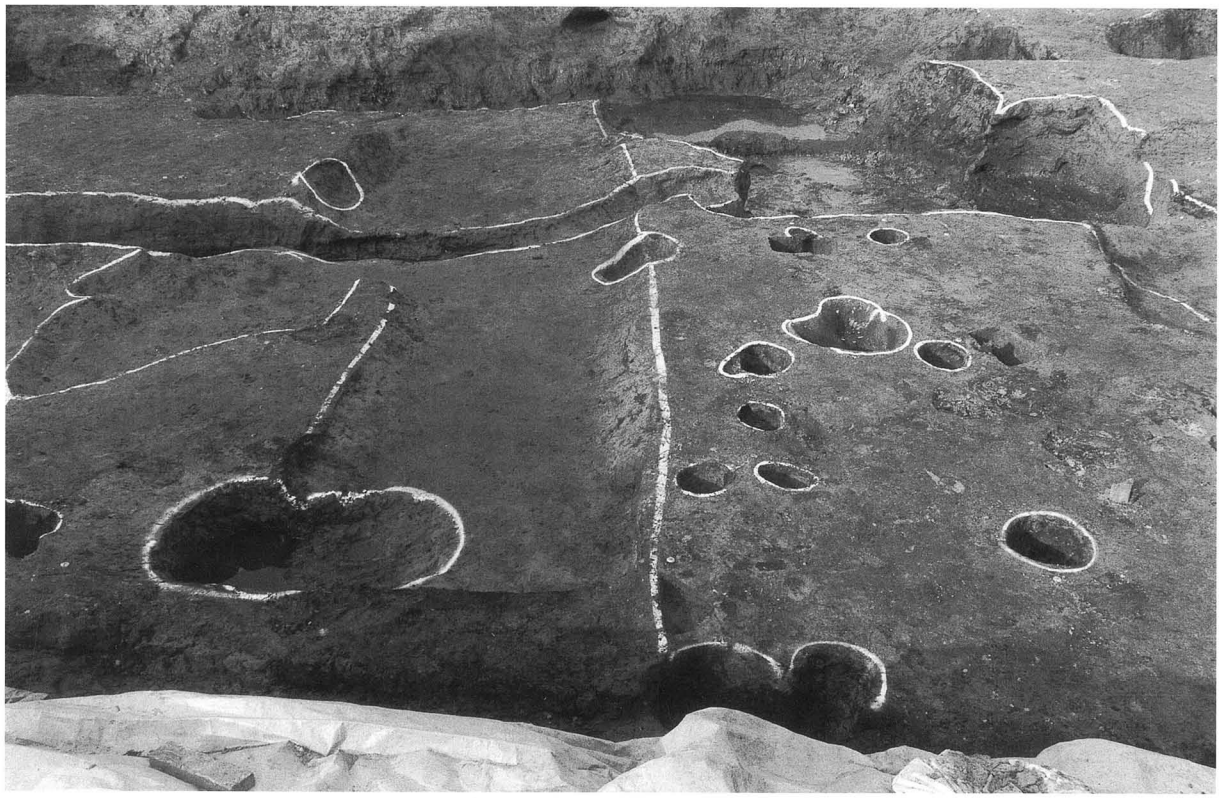
SD19完掘状況（南から）

SD19（北から）

SD20完掘状況（東から）

P01完掘状況

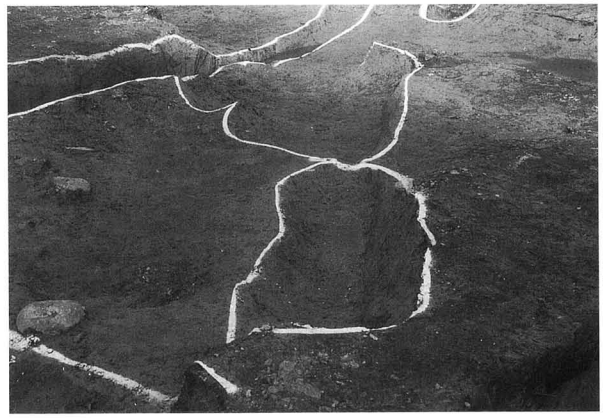
図版10



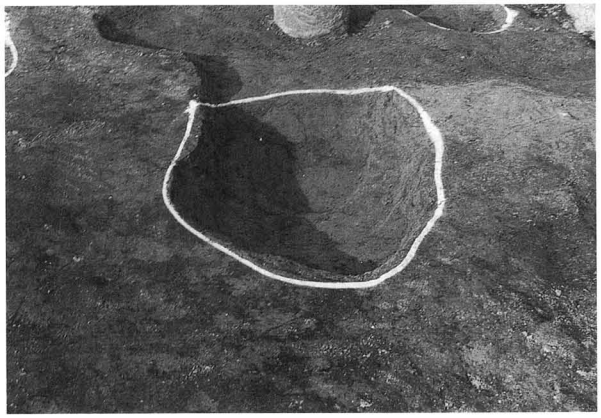
北地区南部ピット群（南から）

北地区南部ピット群（南から）

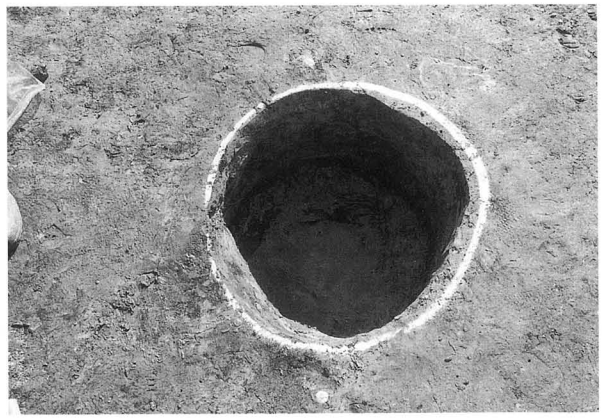
SK01完掘状況



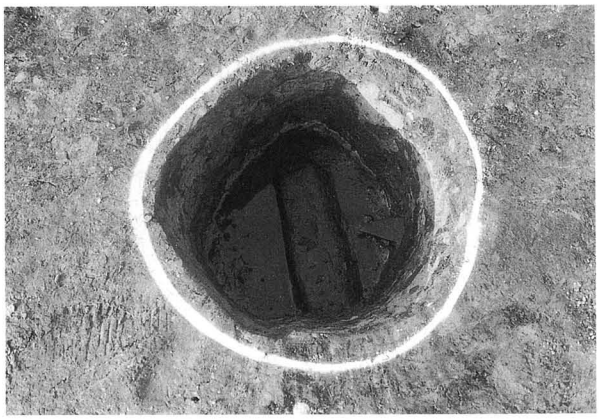
SK02・03完掘状況



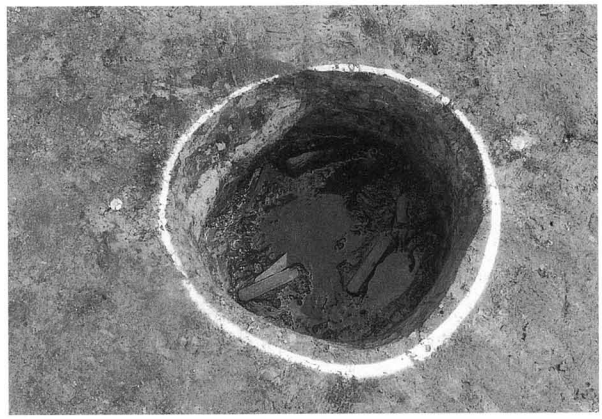
SK04完掘状況



SK05完掘状況



SK05下層遺物出土状況



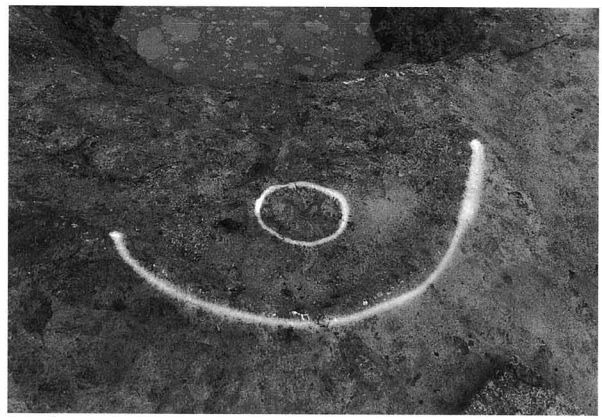
SK05底面遺物出土状況

SK06完掘状況

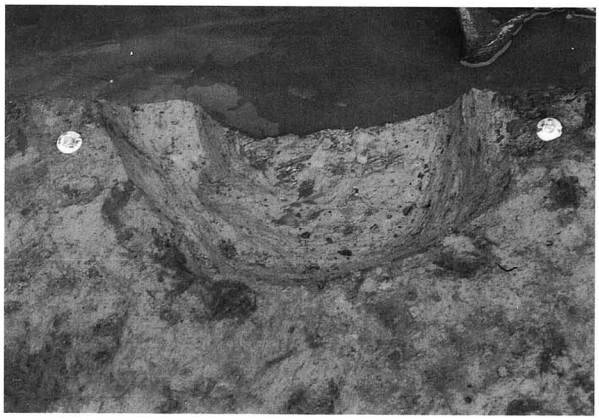
包含層遺物出土状況

図版12

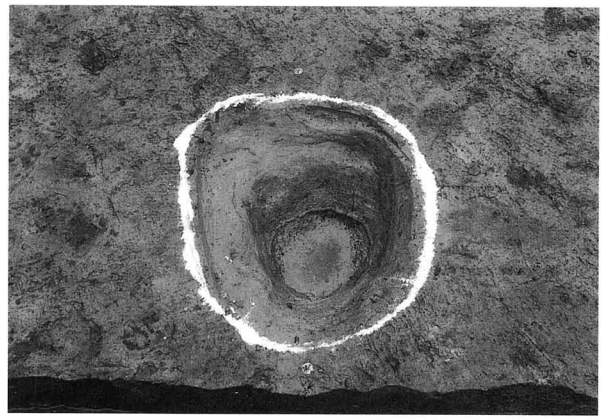
SK10完掘状況



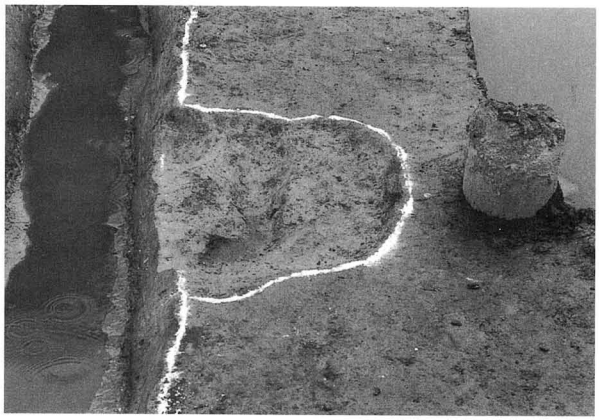
SD12西側の窪穴



SK14完掘状況

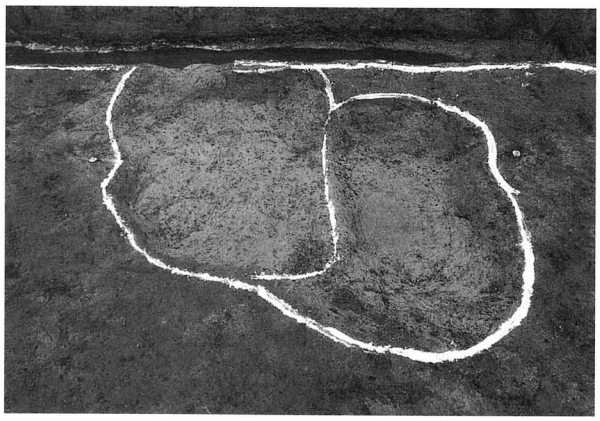


SK15完掘状況



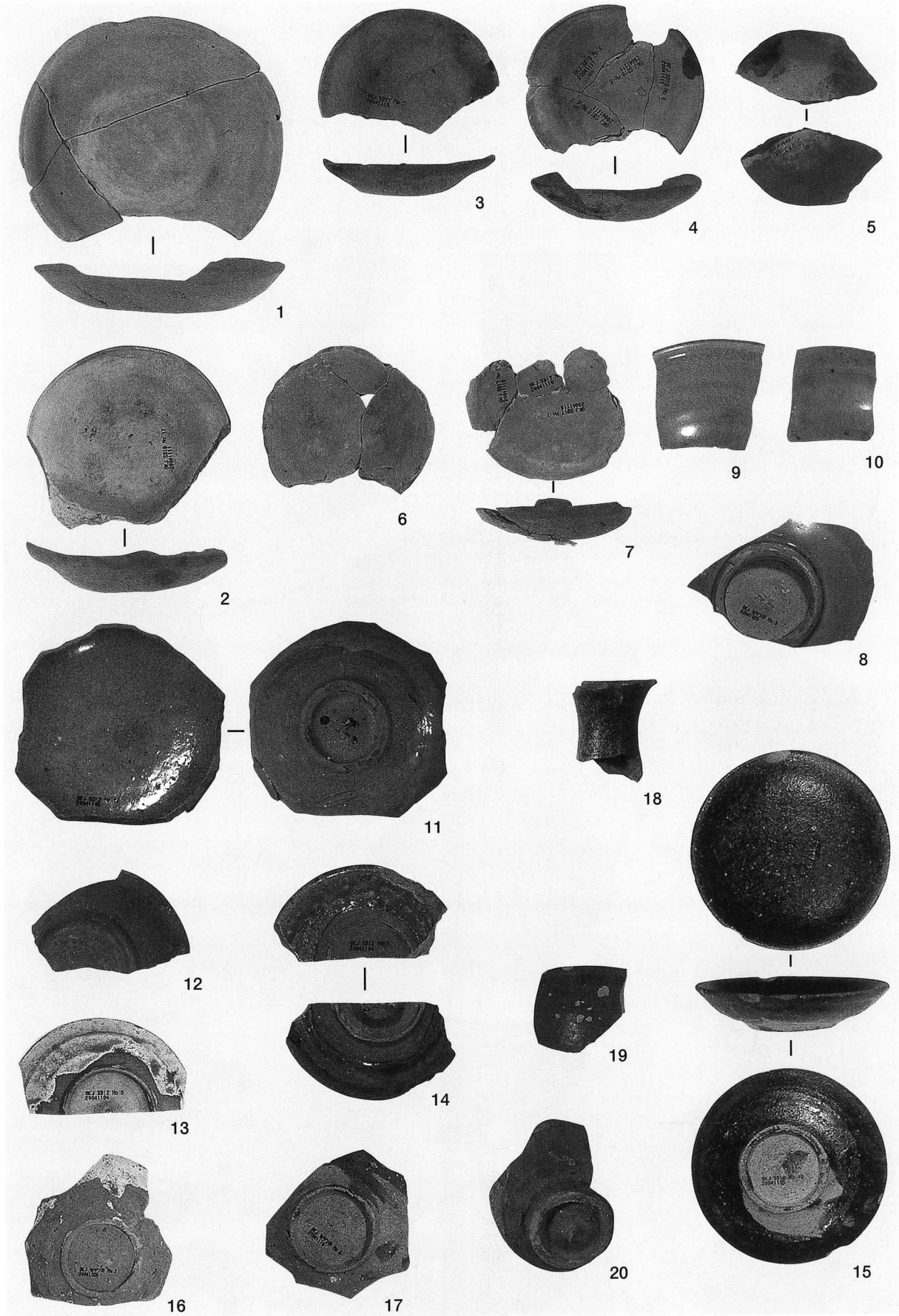
SK16完掘状況

SK16完掘状況



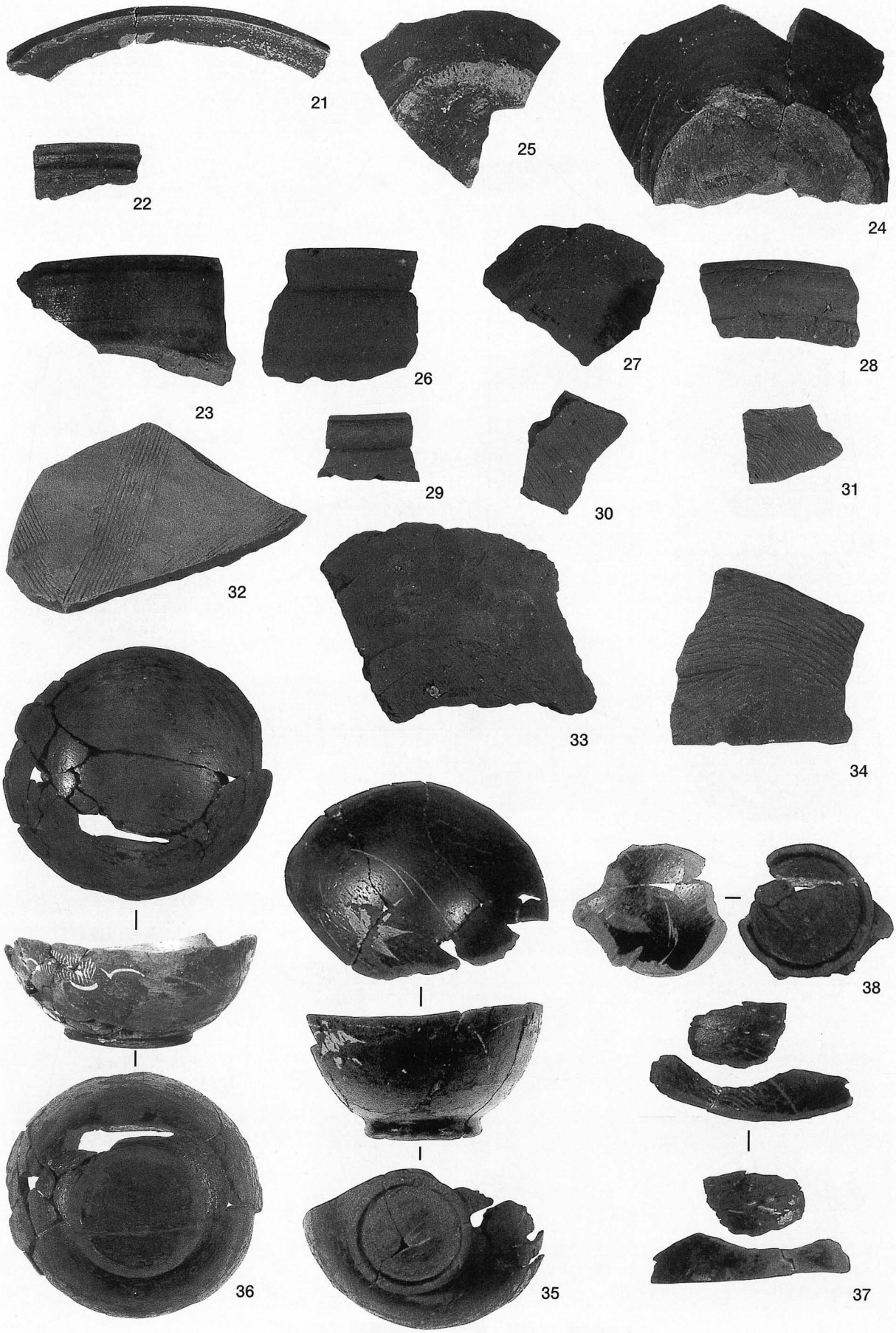
SK17完掘状況

SK22完掘状況



土師器・青磁・唐津・越中瀬戸（1：3）

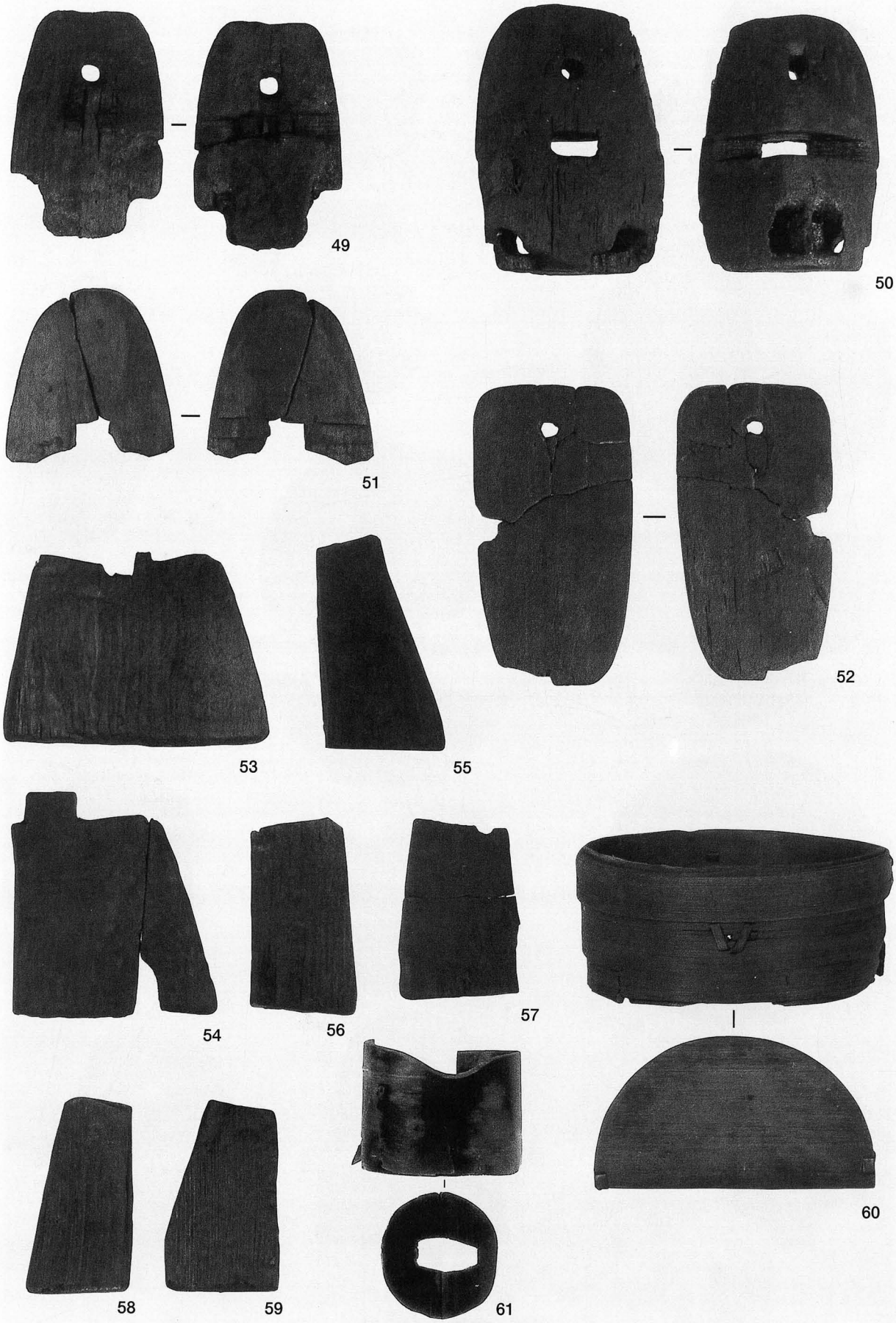
図版14



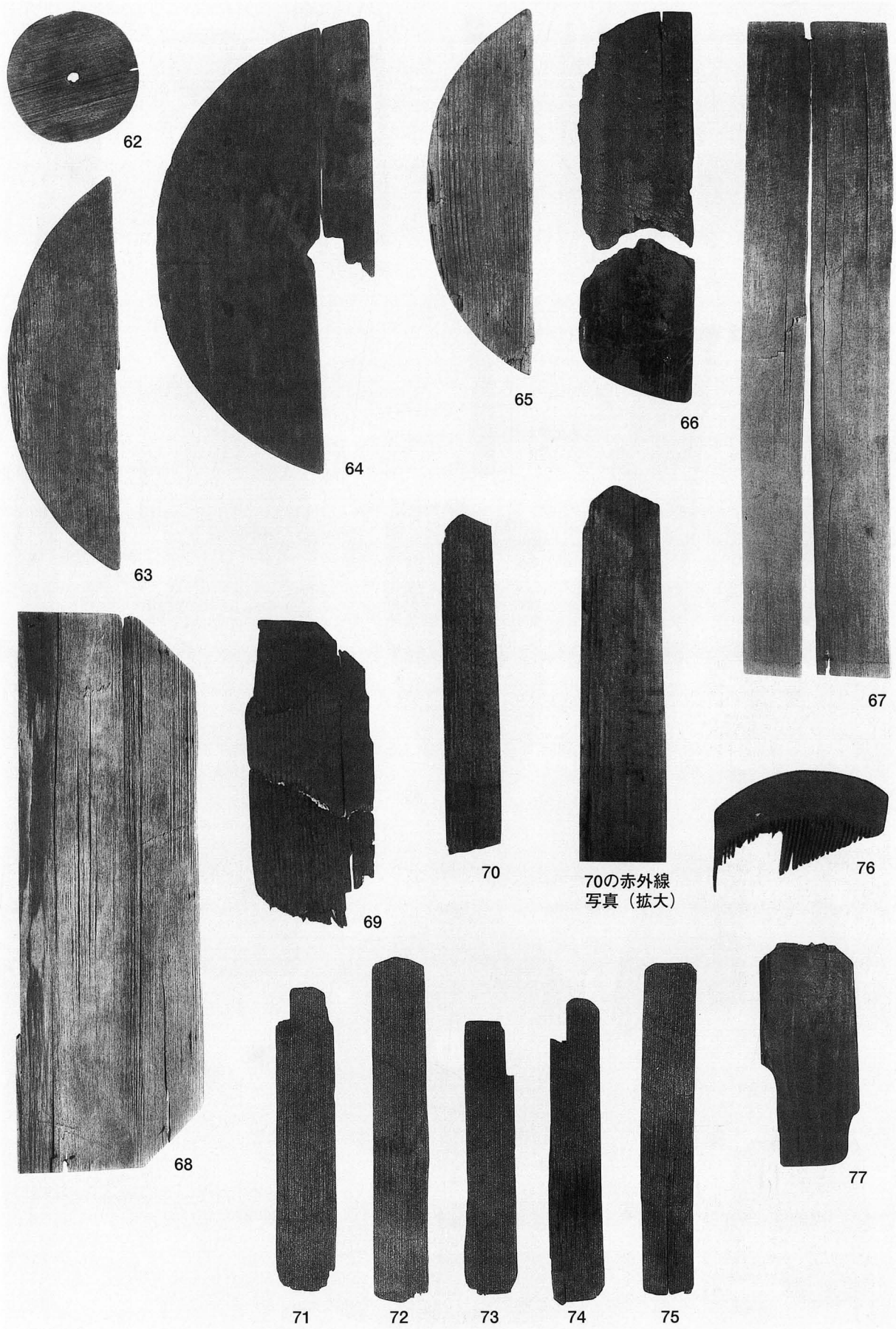
越中瀬戸・越前・珠洲・漆器（1：3）

漆器・木製品（1：3）

図版16

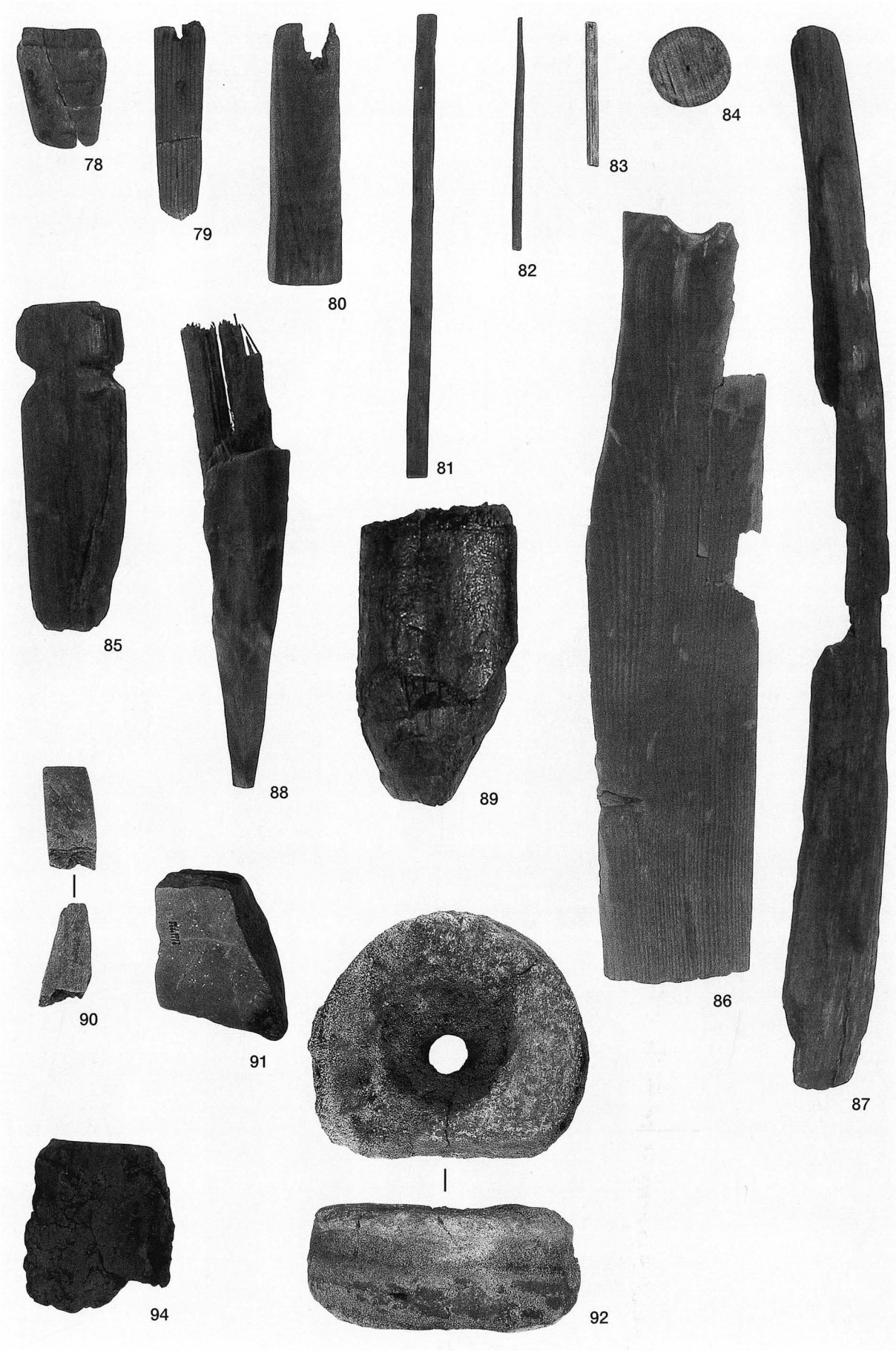


木製品（1：3）

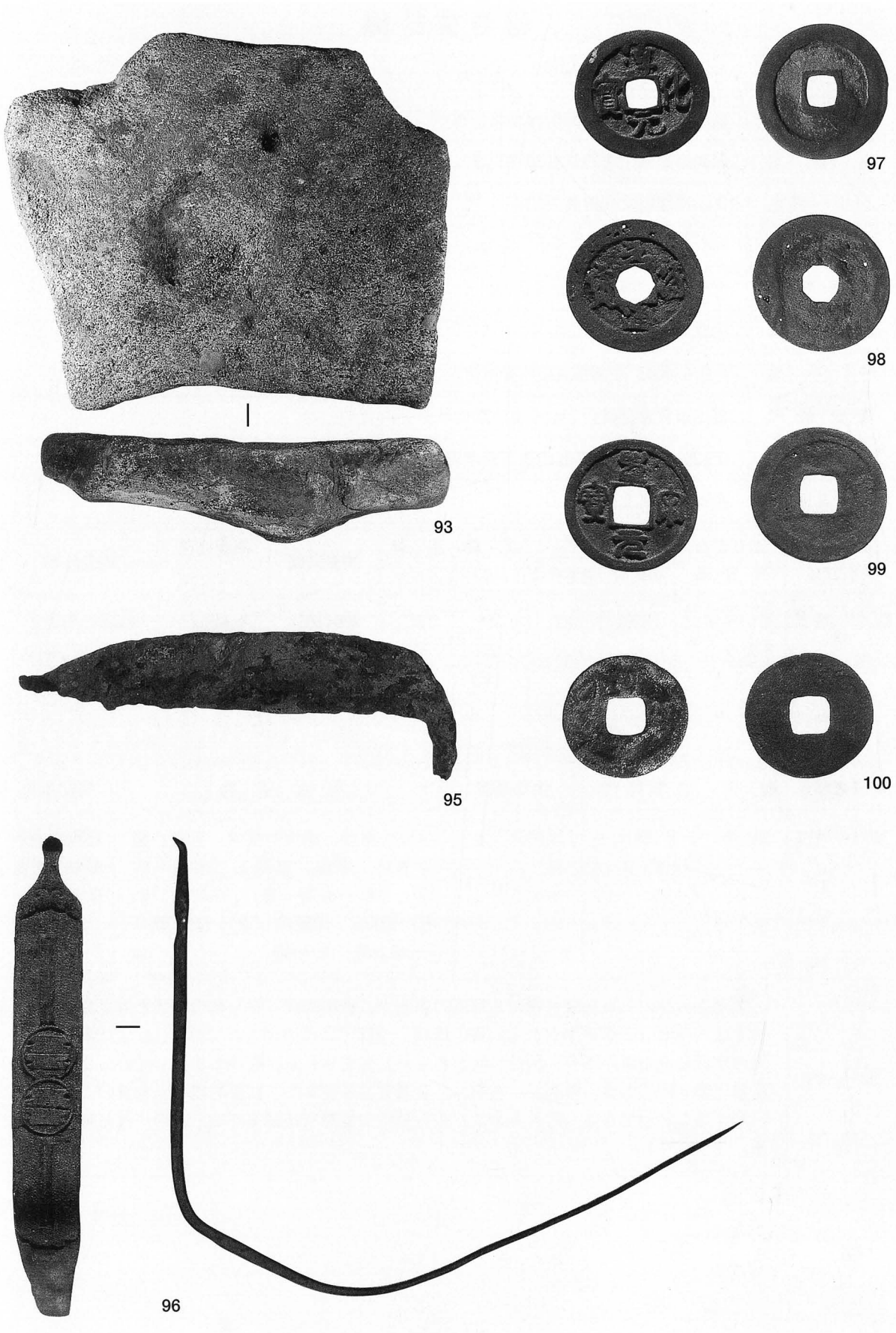


木製品（1：3）

図版18



木製品・石製品・土製品（1：3、86＝1：6）



石製品（1：6）・金属製品（1：1、95＝1：3）

報告書抄録

ふりがな	とやましがんかいじじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市願海寺城跡発掘調査報告書
副書名	自動車整備士専門学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	144
編著者名	土生朗治、戸部孝一、堀沢祐一、古川知明
編集機関	山武考古学研究所
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地　TEL.0476－24－0536
発行機関	富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町５番12号　TEL.076－442－4246
発行年月日	西暦2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
願海寺城跡（がんかいじじょうあと）	富山県富山市野々上字地送13－1（とやまけん とやまし のうえあざ ちおくり）	16201	066	36° 43′ 14″	137° 08′ 38″	20041018 ～ 20041126	1,600m^2	自動車整備士専門学校建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
願海寺城跡	城館跡	中世（戦国～安土桃山）	区画溝、土坑 小ピット	中世土師器、珠洲、越前、青磁、越中瀬戸、唐津、木製品（漆椀・木簡・下駄・曲物・櫛）、石製品（砥石、石臼）、土製品（塼）、金属製品（鉄鎌、笄、北宋銭）	願海寺城下町の一部と推定

要約	願海寺城跡の北東部域に当たる場所の調査で、戦国時代～安土桃山時代と考えられる溝や土坑、小ピットが検出されている。溝は、全部で19条確認されており、L字状あるいはコの字状に巡る溝があり、城館に関わるものと考えられる。溝から出土している主な遺物には土器・陶磁器類、木製品、石製品、金属製品等があり、16世紀後半、末葉の２時期に区別することができる。これらのことから発掘調査箇所は願海寺城下町の一部と推定される。

富山市埋蔵文化財調査報告144

富山市願海寺城跡発掘調査報告書

—自動車整備士専門学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2005年（平成17年）３月31日発行

発　行　富山市教育委員会（埋蔵文化財センター）
〒930-0803
富山市下新本町5番12号
Tel　076－442－4246
Fax　076－442－5810
E-mail：maizoubumka-01@city.toyama.lg.jp

編　集　山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221番地

印　刷　㈱文化総合企画
Tel　0476－93－0593